

「君たち、元気を出さなくちゃ駄目だよ。あと2週間したら君たちが僕をリードしなくちゃならないんだからね」

2人は溜息を吐きながら酒を呑んだ。賢は少し控えめにしていた。

2人をなだめるのに四苦八苦だった。寿司屋を出ると、賢は梓をアパートまで送って行った。梓は寄って行ってほしいと言ったが、賢は愛子のことが気懸かりだったので、寄らずにそのままマンションに帰った。マンションに着いたのは9時半過ぎだった。

「賢パパ、お帰りなさい」

「愛子、ただいま。先に食事をしていればよかったのに」

「ううん、賢パパと一緒に食べようと思って。今日は原さんが出張で居ないの。2人分だから、ハンバーグにしたわ」

食卓にはハンバーグとスープ、サラダが並べられていた。賢は寿司を食べて来たことは口にしなかった。愛子も賢が酒を飲んでいることには触れなかった。ふたりは一緒に食事をした。

「愛子、実はこのマンションを出なくちゃならなくなったんだ。何処かに引っ越さなくちゃならない」

「えっ、本当？・・・それなら、私、原さんのアパートでいい。一部屋空きがあるんだって」

愛子は理由を聞こうともしなかった。

「そうか、それじゃあ直ぐにそこに移ることにしよう。今度はベッドが小さいし、ソファも小さいぞ」

「賢パパ、交代でベッドに寝よう。私はずっと昼で寝ていたから全然平気よ」

「愛子、実は北海道に転勤になるんだ。だから、愛子は一人になっちゃうんだ。それか北海道と一緒に行くか？」

「賢パパ、わたしは来年からロシアに留学するでしょう。今はバレエ教室を替わりたくないわ。暫くの間だから、原さんと同じアパートでいいよ。賢パパには悪いけど、北海道は一人で行って。賢パパ、テレポーションでいつでも帰って来られるじゃない。だから寂しくなんかない」言葉とは裏腹に、愛子は寂しそうな顔をした。愛子が食事の後片付けを

し、賢はシャワーを浴びた。賢がシャワーから上がると、愛子も続いてシャワーを浴びた。ふたりは麻子の位牌の前で両手を合わせ瞑目した。この日は賢がベッドで休んだ。愛子は寝付けなかった。賢はこの日の省察を行った。出張から帰ってから、自分に向けられている藤代達の攻撃の意図がはっきりとは分からなかった。亜希子の帰還について藤代は何も言わなかったし、ストックホルムでの出来事についてもステアリングの会議以降誰も口にしなかった。不可解だったが、賢はそれを探ることは止めた。省察を終え、眠りに着こうとしたとき、頭の中に亜希子の叫び声が聞こえた気がした。賢は再び瞑想状態に入り、意識を亜希子に移した。亜希子の周りを暗い想念が取り囲んでいる。何かは亜希子の両手両足を引いて、暗い闇の中に引っ張り込もうとしている。賢は微息で意識を整えてその暗い意識に近づいた。それは無数とも思える、迷える霊だった。餓鬼や阿修羅が互いに闘争しながら亜希子を奪い合っている。鬼のような大男が口元から血をした垂らせて立っている。その前に亜希子が倒れていて、身体ががたがたと震えている。賢は急いで亜希子に近づいた。賢が暗い意識の群れに近づくと、暗いと思っていた意識に陽が当たったように暗さが消えていって、そこに居た霊達は潮が引くように居なくなった。

「亜希子、大丈夫か？ どうしたんだ!? ここはジェノサイド・メモリアルじゃないか!?!」

賢は亜希子を抱き起こした。亜希子は賢にすがりついた。身体が冷え切っている。暫くそのまま抱きしめていた。次第に賢のぬくもりが亜希子に伝わり、亜希子の顔に赤みが戻った。

「あなた！」

賢は亜希子の手と足を力を込めて擦った。亜希子の身体全体に血の気が戻ってきた。賢は亜希子の身体を抱きかかえながら立ち上がらせた。

「さあ、目を開けて、もう大丈夫だよ」

亜希子は立ち上がった。もう周囲には亡霊達の影は無かった。賢は意識を戻した。意識を保ちながら、眠りに落ちそうになったとき、シーツの中に愛子が潜ってきた。愛子は賢に身を寄せると囁いた。

「賢パパ、行かないで」

愛子は賢が眠っていると思っているようだった。賢はそっと愛子の方に寝返りを打ち、愛子を抱きしめた。

「賢パパ、起きてるの？」

賢は応えなかった。そしてそのまま眠りに落ちた。愛子も暫くして賢の腕の中で安らかな眠りに着いた。

翌日は出張報告会を行った。重役の出席は2名しかなかった。報告は粛々と進めることができた。賢は出席している重役が、自分に敵意を示さなかった人たちであることを認識していた。それは川埜取締役と野際取締役だった。2人は重役の中ではあまり目立たない存在だった。ほとんど質問も出ずに、出張報告会は終了した。その後の2週間の間には正式な会議の開催は無かった。賢は精力的に残務整理を行った。出張報告会の翌日、廊下を歩いているとき、川埜取締役から声を掛けられた。

「内観君、私は実験サイトの案に賛成なんだけどね。その方法しか国民にこちらのしようとしていることを強く印象づける方法は無いと思うよ。また機会は巡ってくるよ。気長に待ったほうがいい」

賢もその通りだと思った。その日、賢は梓と一緒に渋谷のイタリアン・レストランで食事をすることにした。愛子には連絡を入れた。愛子は「原と一緒に食事をするから大丈夫だ」と言った。しかし、電話を切る前に、「早く帰ってきて」と言った。その言葉が賢の耳の奥に残って響いている。

「あなた、わたくし、今度の北海道転勤でそのまま北海道に骨を埋めてもいいと思っているのよ」

「どうしてだ？君のことは、誰しもが前途有望と見ているだろう」

「わたくしは、一生あなたの女房役でいることに決めたの。今ならそれもできるでしょう」

「祐子や亜希子が居なくなってしまったからか？」

「ええ」

「そんな悲しいことを言うなよ。梓は梓じゃないか」

「でも、あなたの心の中には祐子さんと亜希子さんが居るでしょう」

「俺は、全ての人、全ての存在、全ての意識と一体になりたいんだ。祐子も亜希子も、梓も一つも変わらない。君とはずいぶん長い間、一緒に生きてきているように感じる。もう僕の半身の様な存在だよ」

「わたくしにとって、あなたはもう離れることのできない存在になってしまったの。でも、女房役は女房を超えられないのよ。自分の意識としてそうになってしまうの」

「にわとりと縄の話を知っているか？」

「鶏は自分を縛っていた縄を目の前に置かれると動けなくなると謂う話？」

「そうだ。人間の意識も同じさ。君が女房役の「役」という言葉に縛られて身動きできないのも、にわたりの「縄」に対する意識と同じだと思うよ」

「私は鶏ね。あなたがその「縄」を解いて、わたくしの目の届かないところに投げ捨ててくれば、わたくしは自由の身になるわ」

「分かった。今それを解いてあげるよ」

賢は真剣に瞑想に入った。梓の意識は自分に課した制約事項の経文で出来た轡を嵌められていた。賢はその経文の轡を解いた。そして、それを虚空に向けて投げつけた。梓は、轡の呪縛から解放された。賢は瞑目を解いてから言った。

「呪縛の「縄」を外して、虚空の彼方に投げ捨てたよ」

「あなた、ありがとうございます。わたくしは、生来のわたくしに戻ったのですね。今度はわたくしの自由な意志であなたに接します」

ふたりは笑った。梓は、賢が冗談を言って戯れているのだと思った。しかし、そう言われて何となく意識が解放されたような気もした。

食事が済むと、賢は梓をアパートまで送った。梓は、賢の手を取って、アパートに寄って行ってと言った。いつもの梓ではなかった。甘えているのが賢には分かった。賢は30分だけと断って、梓の部屋に入った。梓は、直ぐにコーヒーを入れた。

「あなた、北海道では一緒に住みませんか？」

「えっ？同棲か？」

「ええ、もっとあなたの身近に居たい。あなたを一人で放っておけません」

「だけど、君は直ぐに赴任する訳じゃないだろう？」

「ええ、でも、できるだけ早く転勤の辞令を出して貰います」

「どうしたんだ、急に積極的になって。呪縛を解いたからかな」

「いいえ、これまでと同じですよ。私はあなたの女房役です。役が附いても関係ありません。これは私の心の問題です。会社からの指示ではないのですから、私のしたい様にさせて貰います。勿論あなたの許しを得てからね」

梓は、コーヒーカップを賢の腰掛けているソファの前のテーブルに2つ並べて置き、自分は賢の横に、賢に身体が附くようにして座った。賢はコーヒーを啜ると、カップをテーブルに戻した。梓が賢を見つめている。賢は梓を抱きしめて口づけをした。梓は目を瞑った。

「北海道に行ったら、あなたはもう家に帰らなくてもいいのですからね。今日は仕方ないけど」

ふたりは再び口づけを交わした。梓は身体の力が抜けたようにだらりと腕を落とした。しかし、賢はそれ以上先に進むことをしなかった。

「梓、愛子のことをどうしたらいいか、君も考えてくれないか？」

「分かったわ。愛子さん、かなりしっかりしているから、寂しさをどう紛らわすか、どうしたら安心して生活できるか、それを考えるわ」

ふたりは暫く一緒に話していたが、部屋に入ってから、計ったように丁度30分経過すると、賢は梓の部屋を後にした。

マンションに戻ると、愛子と原が入り口で出迎えてくれた。ふたりは首を長くして待っていた。ソファに腰掛けながら賢が言った。

「どうしたんですか？待たしちゃったみたいですね」

「賢さん、愛子さんから話を聞いてふたりで相談したんです。意見は食い違っているんですけどね。賢さん、北海道に行ってしまうのだそうですね。やはり北海道は遠いから、いくら、飛行機やテレポーションで直ぐに来れたとしても、やはり目が届かないと思うんです。愛子さんを一人にしておくわけにはいかないでしょう。それで、僕が愛子さんと一

緒に住もうかと考えたんです。それで賢さんの意見を聞こうかと思って待っていたんです」

「僕もそのことが一番気になっていました。愛子から聞いたと思いますが、このマンションを出なくてはならないんです。愛子に原さんの住んでいるアパートに空き室があるって聞いたんで、そこに1室借りて、愛子を住ませたらどうかと思ったんですが……やはり、中学生の女生徒が一人で生活するのはどうかとも思うし。原さんは親切心でそうおっしゃってくれるんでしょうけど、愛子が押し掛けたんじゃあ原さんに迷惑が掛かるでしょうし」

「いいえ、僕は何にも問題ありませんよ。それより愛子さんが居れば、ダンスの練習なんかも直ぐにできるし、その上食事の支度もして貰っちゃったりして、僕にはメリットの方がずっと多いです。ちょっと、部屋が狭いですけど」

黙って聞いていた愛子が、にっと笑って言った。

「わたしは、普通ならもう高校生だよ。一人でも生活できる。その方が、誰にも迷惑を掛けなくて済むもの。原さんはわたしのことを考えて言ってくれるんだけど、わたしが一緒だと絶対仕事の邪魔になるよ。だけにご飯は原さんと一緒に食べてもいいし、それにご飯の支度は私がする。本当はね、私、独りで住んでみたいんだ。ロシアに行ったら一人で生活しなくちゃならないでしょう。だから、一人暮らしのテスト期間ってことにしたらどうかな。ねえ賢パパ、いいでしょう。原さんと同じアパートだったら心配ないでしょう？独りで住みたい！」

賢が応えた。

「原さん、どう思いますか？愛子は、どうも一人で生活したがつているように思えるんですけど」

「どうやら、一人住まいになりそうですね。僕は一向に構いません。愛子さんが近くに住んでいてくれたら、何かと都合がいいし、何と言っても安心ですから」

「じゃ、早速明日にでもアパートの契約に行きましょう。親の承諾と、保証人が必要になりますから、原さん、保証人をお願いできますか？」

「勿論です。明日は土曜日ですから愛子さんも休みだし、朝から契約の手続きをしましょう。今空いている部屋は1階なんです。僕が1階に移動します。愛子さんには今の僕の部屋に入って貰った方がいいと思います。その方が安全ですから」

愛子は胸躍るような気持ちだった。にこにこしている。原が帰宅すると、愛子は賢に抱きついた。

「賢パパ、ありがとう。一人で住んでみたかったの。嬉しい。わたし寂しくなんてない」

由仁

賢は土曜日に札幌に移動した。千歳空港は道庁札幌の空の玄関口だけあって、ビジネスマンや観光客で賑わっていた。賢はこの空港でチェックイン待ちの間に姿を消した第5の失踪者、浮石康夫のことを思い出していた。この空港にはそのような特殊な場といった雰囲気は感じられない。いずれはこの事件にも取り組まなくてはならないと思った。賢は札幌の郊外にある廃業した酪農牧場の1戸建ての家を借りることにしていた。レンタカーの受付に行き、事前にWEBで予約しておいた普通車のライトバンの鍵を受け取って、レンタカーの駐車場に移動した。ハッチバックのライトバンにスーツケースと手荷物を載せてから、ナビゲーションシステムをセットした。空港からは30キロ、札幌市街から40キロ近く離れた由仁という場所だった。賢は窓を開け放して走った。空港から離れると、周囲はもうすっかり秋の色に染まり、陽は高く昇っているのに、直ぐに冬になるのではないかと思うほど空気も澄んで冷たく感じる。羽田で搭乗ゲートに入っていくときの情景が目に浮かんだ。唇を噛みしめた愛子が涙ぐんでいたのを思い出した。梓は微笑んでいた。楠木は深く頭を下げていた。原が

「賢さん、直ぐにPCを接続してくださいね。メールとスルースカイで直ぐに連絡してくださいね」

と言って、手を振っていた。

目的の家はなかなか見つからなかった。ナビゲーションシステムの示す場所には、普通の家しかなかった。とても廃業した牧場の中の家屋という感じではない。その家には人が住んでいるように見える。家の前には手入れの行き届いた200坪ほどもある広い庭があり、庭には池もある。家の裏には山が迫っているが、山までの距離は200m以上ありそうだった。その周辺には家は無かった。賢は庭の隅の駐車用と思われる空き地に車を停めた。ほとんど人工物の無い周囲の景色を眺めながら玄関まで歩いた。玄関にはインターホンが付いていた。

「どなた様ですか？」

応答が帰ってきた。

「あのう、ちょっとお尋ねしたいのですが、この辺りに以前牧場をしていて、今借家になっている、関野さんというお宅はありませんでしょうか？」

「はい、その家ならここです。今ドアをあけますから、少しお待ちください」

頭髪は薄くなっているが、エネルギーに感じる小柄な50歳ほどの男性が姿を現わした。ドアは2重になっていて、内側の扉が内開きになっていた。

「内観さんですか？」

「はい、内観です」

「お待ちしておりました。さあ、どうぞ中にお入りください」

賢は部屋の奥に通された。室内は人が住んでいるような雰囲気は感じられなかったが、家具や調度品などが揃っていて、直ぐにでも住めるような状態になっていた。

「今朝、お着きになったのですか？ ご連絡頂ければお迎えにあがりましたのに」

男性は言った。

「はい、どうせ車が必要になりますから、空港でレンタカーを借りました。「廃業した牧場の家」というWEBの紹介ページのタイトルから想

像していた家とは全く違うので驚きました」

「そうですね。写真も出してないので、応募する人も少ないんですよ。それに、家賃もそれほど安くはありませんし、札幌からは少し離れているでしょう。あなたが応募された6番目の方で、しかもそのままご契約したいとおっしゃって頂いたので、はっきり言って驚いています」

「僕も驚いています。こんな立派な家を想像していませんでしたから。写真で確認することもできなかったでしょう。どんな家かと思っていました」

「ご不安でしたでしょうか？」

「いいえ、僕は静かに過ごせる場所ならどこでもいいと思っていましたから、こんな立派な家で、正直なところびっくりしているのです」

「気に入って頂けて光栄です。申し遅れましたが、わたくしはこの家の管理責任を任されている不動産会社SRECの藤垣と申します。この家の持ち主は神戸でかなり大きな電気店を経営していて、店舗も10店舗ほど展開していた方ですが、競争社会に疲弊してしまって、牧場での生活に憧れて、自社の株式を全て売却してここに移り住んだんです。しかし、牧場でもやはり経営という金銭に絡んだ生活を余儀なくされて、それにも嫌気が差し、その上奥さんを亡くされて、今度はブータンに住みたいと言って、一旦インドに住居を構えることにしたんです。その後、どうなったのかははっきりしませんが、時々連絡が来ます。当社が委託を受けていまして、借り主が決まったら当社が毎月指定の口座に家賃を振り込む契約になっています。ですから、何か不都合があっても、全て当社に連絡を頂きたいのです」

そう言うと、藤垣は名刺を差し出した。肩書きは専務になっていた。賢も自己紹介をしたが、名刺は出さなかった。藤垣は賢を連れて家の中を案内した。WEBの紹介には40坪の平屋建て、家具付きの家だと書かれていた。家の中を廻りながら、藤垣の説明を聞いているうちに、賢はこの家がとても40坪には思えなくなってきた。

「お聞きしていたより、広いように感じますが・・・」

「そうです。40坪というのは、最初に建てたときの坪数で、登記はそ

うなっていますが、その後20坪ほど建て増しをしてありますから、今では60坪ほどになっていると思います」

広い居間には中央にストーブが置いてある。壁には造り付けの飾り棚があり、そこに4、50インチの薄型のテレビをセットできるようになっている。その周囲は書棚になっていた。ソファも4人掛けの長椅子と、ペア掛けの椅子がそれぞれ1つ、それにシングルの椅子の合計3脚があって、中央に生板で造ったテーブルがある。居間の奥にはデスクもあった。キッチンには居間からは見えないようになっていたが、西洋風の広いキッチンで、IHのシステムキッチンが取り付けられてあり、食器洗い機やオープンレンジも組み込まれていた。浴室は居間に直接附いておらず、一度扉を開けて廊下に出なくてはならなかった。廊下の突き当たりがガラスの引き戸が附いた部屋になっていて、洗面所があり、そこで着替えをして、浴室に入れるようになっていた。洗面所には空調機が附いていた。藤垣は、空調機は暖房用だと言った。冬は裸になる前に、暖房を効かせる必要があると言った。まるで旅館の風呂を思わせる広い造りになっていて、マッサージチェアや、フィットネス用の歩行・トレーニングマシンも置いてあった。藤垣は「トレーニングマシンは冬場、外に出られないので、ここで体力維持を図ろうとしていたのでしょう」と言った。浴室は脱衣所に比べてそれほど広くなかった。タイル貼りの浴槽で、湯船の深い、中腰で入るタイプの浴槽だった。「夜間電力を使うタイプの給湯設備です」と藤垣が言った。居間と浴室の間に廊下に沿ってトイレと6つの部屋があった。居間の近くの二つの部屋はいずれも洋室で寝室だということだった。藤垣は一つが亭主の寝室、もう一つは妻の寝室だと言った。どちらの部屋にも空調の設備があり、亭主の寝室の方には机が置いてあり、妻の寝室の方にはドレッサーが置いてあった。部屋はいずれも12畳程度でそれほど広くは感じないが、それは部屋に入るとキングサイズベッドが目飛び込んで来て、圧迫感を受けるためだった。その隣に趣味の部屋と呼ばれる部屋が2部屋あり、亭主の寝室側が妻の趣味の部屋、妻の寝室の隣が亭主の趣味の部屋だとのことだった。亭主の趣味は写真で、ここには様々な写真の設備があったとのことだった。

壁には4枚の山の写真が飾られていた。妻の趣味はトールペイントで、以前は画廊のようだったとことだった。藤垣は「どうして互い違いにしたのでしょうかね」などと独り言を言っていた。浴室側にも2つの部屋があった。両方とも8畳で、一部屋が和室、もう一部屋は洋室でベッドが置いてあった。ここは客間だということだった。各部屋には窓が附いていたが、いずれも2重窓になっていた。

「広い家ですね。こんな家に一人で住むのも、ちょっと寂しい気がしますね」

賢が言うと、藤垣は頷いて言った。

「この家に引っ越して来てから、3年ほどで奥様が癌を患って、お亡くなりになったんです。その後、ご主人は一人で暮らしていらっしゃったのですが、寂しさに耐えられなかったんじゃないかと思います。仲のいいご夫婦でしたから、初め寝室が別だと伺って、ちょっと奇妙に感じました。でもここを出て行かれるときにご主人がおっしゃっていましたが、ご主人の躰が尋常じゃなくて、奥様がとても一緒に眠れなかったので、ご主人が別の部屋を用意されたとのこと。その時に増改築したようです。ご主人がインドに行かれたのも、本当は牧場の経営に嫌気が差したのではなくて、お一人での生活が寂しすぎて、ここから離れたかったのではないかと我々は思っています」

「お子様はいらっしゃらなかったのですか？」

「ええ、いらっしゃらなかったんです」

「それじゃあ、きっと寂しい日々を過ごされたのでしょうかね」

「はい、その通りだと思います。それから、家の前の庭はご覧になりましたでしょう。あそこはご主人から委託されて、我々が毎月手入れをしています。ですから奇麗で、まるで人が住んでいるようでしょう。それだけじゃないんです。この山との中の土地は3000坪ほどありますけど、それはここのご主人が牧場として使っていた土地の一部で、牧場のほとんどは手放されたのですが、一部を残されたのです。その土地も自由にお使い頂いて結構です。とは言っても牧場以外に使い道も無いでしょうけど」

「それにしても、これだけの家を、WEBに記載してあった金額でお借りできるのですか？ちょっと条件が良すぎて気味が悪いんですが、何か、特別の理由があるのではないですか？」

「特に条件みたいなものはありません。勿論家賃3ヶ月分の敷金と3ヶ月分の礼金をご用意頂きます。これは手前共の収入になります。ここを出る場合は、お預かりする敷金から補修費を差し引いて、残りはお返しいたします。ご主人はここに住まわれる方がもしここを全て買い取ってくださる意志がおありなら、そのときは相談に乗るとおっしゃっています。最近はお目にかかっていますから、その気持ちが変わってないとも言いきれませんが、もし内観様がお望みならそうおっしゃってください。送金の時に連絡してみます。凄くお買い得な物件だと思いますよ」

「本当に条件は無いのですか？」

「これは条件ではないのですが、一つ我慢して頂かなくてはならないことがあります。先ほど申しあげました通り、これまでも6組の方が引き合くださったのですが、一組を除いて、5組の方はこの話をすると、途端にキャンセルされました。みなさん、クーリングオフの手続きを取られました」

「何ですか？大抵のことには驚きませんよ」

「出るんですよ」

「何が出るんですか？」

「奥様のこれですよ」

藤垣は幽霊のポーズをして見せた。賢は平然として言った。

「そうですか。出るのはそれだけですか？」

「あと、夜中に扉ががたがた鳴ったり、空中にもものが浮かんでそれが壁にぶつかって壊れたりするんです」

「そういえば、キッチンの壁に変な傷があるなと思いました。ポルターガイストですね。それは何時からですか？」

「ご主人がおられる頃は、そんなことはなかったようです。奥様の幽霊は出ていたようですが、毎晩ご主人とお話をされて、明け方近くになると、おとなしく消えて行くとご主人はおっしゃっていました。でも、

ご主人がインドに旅立たれてから、最初に若い未婚の男女4人のグループが共同でこの家を借りたのです。4人は幽霊など信じないと言っていましたので、私が亡霊が出る話をしてもしも笑い飛ばしていました。確かに彼らは住み始めても、亡霊が出たという話はしていませんでしたが、夜になると、いろいろなものが空中に浮いたり壁にぶつかったりする現象が現れてきたと言うのです。昼間はそういうことはほとんど無かったと言っていました。それで、我々は大学の先生や研究者を連れて調査に来たのです。4人にも立ち会ってもらって調査したのですが、そういう現象は全く確認できませんでした」

「それはそうでしょう。唯物的な観念を持っている研究者や、霊の仕業だと考えている霊能者がこの場に立っても、時空間の歪みなどの現象は現れないでしょう。その人達の意識が、時空間を固定的なものに変えてしまいますからね」

藤垣は良く理解できないようだったが説明を続けた。

「4人も調査に立ち会っていましたので、現象が現れないことに苛立ちを隠せませんでした。我が社としてはあくまでビジネスという観点から、4人に調査結果の報告書を見せて、そのような現象が起きているとは信じがたいと伝えたのです。しかし、若者達は納得しませんでした。特に夜、キッチンの引き出しが自動的に開いて中からナイフやフォークが飛び出してきて空中に浮いたり、壁にぶつかったりしていたと一人の女性が言っていて、どうしてもここから出たいので解約したいと申し入れてきました。当社も事故でもあったらまずいということになって、仕方なく申し出を受け入れました。我々はまだこの現象が起きるかどうかわか確信が持てていません。でも、万が一そのようなことがあると危険ですから、ナイフやフォークなど凶器になりうるものは、鍵の掛かる引き出しに入れておいて頂かなくてはなりません」

「他に、ここに来た人が事故に遭うとか、病気に罹るといったことはないですか？」

「それは無いと思います。でも、ここまで来られてこの話をお聞きになると、大抵の皆さんがご立腹になって帰られてしまいました。その後、

ここに来られた方々の身に何か起きたという報告は受けていませんが、多分、何かあっても連絡するのも厭なのだと思います」

「分かりました。この家をお借りいたします。所定の手続きを済ませたいのですが・・・」

藤垣は大きく目を見開いて、賢を見つめた。

「書類は全て用意してあります。内観さんはWEBで仮契約を済ませてくださっていますから、後は契約書へのご署名と実印を押して頂き、保証人のご自筆の署名と実印を頂くだけです」

「契約書は預からせてください。保証人の署名を貰ってから送り返します」

「分かりました。それでは、今日は手付け金だけでもお支払い頂けますか？」

賢は手付け金10万円を支払った。元々ここを借りるつもりだったので、既にこの住所宛に荷物を発送してある。着荷はこの日の午後の予定だった。藤垣が言った。

「もし明日以降、キャンセルをなさりたいとおっしゃった場合でも、このお金は戻りませんがよろしいですか？」

「構いません」

一通りの説明をし、契約書を封筒に入れて賢に渡すと、藤垣は札幌の事務所に帰って行った。賢はショルダーバッグから空港で買って来たパンと豆乳のパックを取り出して、キッチンの横にあるテーブルの椅子に腰掛けて食べた。食べ終わるとパンの袋を丸め、豆乳の空きパックと一緒にキッチンのテーブルの上に置いてから、食卓に戻ってしばし寛いでいた。しかし、どうも周囲に落ち着かない雰囲気を感じる。そのとき、キッチンの調理台の上に置いた豆乳の空パックが少し動いたように見えた。賢は気の所為だろうと思った。しかし、それから10秒ほどすると、豆乳のパックは少し空中に浮いて、調理台の上を滑るように動き、床に落ちた。その隣にあったパンのビニール袋はピクリともしない。賢は意識の次元を上げてみることにした。しばし瞑想して静かに目を開けてみると、キッチンの調理台の領域に混沌としたエネルギーの流れが見えて

きて、それが時々均一性を失って、乱れているのが分かった。その周辺のエネルギーのバランスが崩れている様に見える。賢は一旦瞑想を解き、もう一度この家の中全体を見て歩こうと思った。

「このエネルギーの流れは、現象界の風のようなものだから、これがポルターガイストを起こしているのかも知れない。写された世界で、エネルギーが均一性を失うということは、どこかから強い意識が作用しているとしか思えない。しかしここには誰も居ない」

テーブルから離れると、自分を取り囲む場の雰囲気はすっきりしてきた。キッチンの周辺を除いて、居間の空間には異常は見られない。賢はドアを開けて廊下に出てみた。廊下にも特に変わった雰囲気は感じられない。洗面所、浴室にも二つの客間にも異常な雰囲気は感じられなかった。しかし、妻の趣味の部屋に足を踏み入れると、少し違和感を覚えた。壁に掛けてある支笏湖の絵には、特に強い意念を感じた。時空を切り替えて観察してみると、やはりその絵の廻りと、奥にある机の周辺には、エネルギーの歪みが生じているのが分かる。部屋全体が、まるで「ムクの叫び」に描かれた背景を見ているような感覚を賢に与えた。次に亭主の趣味の部屋を覗いてみた。そこには、特に空間の歪みは感じない。一旦廊下に出ると、そのとき玄関の呼び鈴が鳴った。宅配業者が来たのだ。段ボール5箱の荷物を受け取ると、賢は宅配業者に粹あてに送る契約書を速達で依頼した。業者がそれを受け取って引き上げると、賢は早速ダンボールを開梱して、見慣れた品物をクローゼットや棚に納めていった。文具類は亭主の趣味の部屋に納めることができた。衣類は亭主の寝室のクローゼットに収めた。亭主の寝室はいつでも寝ることが出来るように、新しい寝具一式が用意されていた。そこにも異様な雰囲気は感じなかった。書籍は居間の書棚に収め、ファイル類は趣味の部屋の机の上に置いた。賢は原の言葉を思い出した。PCを居間の机にセットすると、既に設置されているブロードバンドルーターに接続してから電源を入れた。原からメールが入っていた。賢は「無事借家契約を終えた」と返信した。洗面用具やタオルなどを洗面所の棚に収めてから、最後の一箱を開梱した。それは、オーラビジョン・システムだった。原が1台手

元に置いて欲しいと言って発送したものだ。賢は一人で生活している間に、いろいろ実験をしてみようと考えていた。そのシステムはとりあえず趣味の部屋の机の横に置いた。見たこともない小型の携帯端末も同梱されていたが、取り敢えずそれもオーラビジョン・システムの上に置いた。全てのものが収まったので、段ボール箱を片付けて、先ほどの続きを行うことにした。亭主の寝室は、衣類の整理の時に確認したが、もう一度その部屋に入り、認識している時空間を切り替えてみた。ベッドの上の空間にボイドのような暗い部分を感じた。そのほかの領域には特に変わった印象はない。そのボイドに意識を集中してみた。それは欠乏の意識だった。空虚さと悲しみが合わさったような感情が沸き上がってきた。賢はその意識から離れた。次に妻の寝室に入ってみた。その部屋は入っただけで威圧感を覚える。どうやらそれはキングサイズベッドの大きさから来るものだけでなく、もっと強いものようだった。ベッドの上全体が強い意識のベールで覆われているのが分かる。それはまるでバリヤを張ったように圧迫感を与えていた。部屋の奥にあるドレッサーの周囲には凄惨なエネルギーの渦のようなものが見えた。そこには強い執着の意識が張り付いているように感じられた。賢は一先ず意識の次元を変えることは止めた。霊的な存在に接近するのはもう少し後にしたかった。一旦居間に戻ると、梓からスマホに電話が掛かってきた。

「あなた、もうそちらの家には着いているの？」

「うん。不動産屋さんも帰り、さっき荷物も届いたんだ。そうだ、保証人になってくれないか？」

「勿論よ。書類はどこにあるの？」

「もう君宛に送ってしまったよ、明日の午前中に着くと思うから、署名と、実印を押して送り返して欲しいんだ」

「分かったわ。それで家はどんななの？」

「いや、それがびっくりするほど広くて綺麗だったよ。あの家賃からは想像できないほどいい家だよ。まだ、それほど古くないしね。それに大きな庭と、3000坪の牧場まで附いているよ」

「えっ？牧場？何かしなくてはならないという条件があるの？」

「いや、ただあるだけで、何に使ってもいいらしい。現在はただの草原くきはらになっているようだけどね」

「でも、そんないい条件で、どうしてそんなに安いのかしら？」

「出るんだそうだよ」

「何が？熊でも出るの？」

「いや、幽霊だよ？」

「冗談でしょう？今時幽霊なんて、誰も信じないわよ」

「そうだね。だから、借りることにしたんだよ。今夜、幽霊が出るかどうか確かめてみるよ。それにポルターガイストもあるんだよ」

「あなた一人で大丈夫？気を付けてね。何かのトリックだったりすると危険だから」

「ありがとう。ところで、そっちはどうだ？」

「大丈夫よ。愛子さんも、新しいアパートが気に入っているし、原さんの仕事も、今日は特に問題なくて一応落ち着いているし、プロジェクトのことは月曜日から新しい体制になるでしょう。わたくし暫くはおとなしくしている。できるだけ早く北海道に転勤になるようにするから。あなたも一人で大変だけど、それまで頑張っていてね」

「うん、君が来るのが楽しみだよ」

梓が電話を切ると、賢は亜希子に意識を投げ掛けてみた。亜希子は直ぐに反応を返してきた。

「亜希子、この前はどうしたんだ？」

「わたくしはジェノサイド・メモリアルに行って、あそこで彷徨っている人たちの魂を鎮めて、帰霊できるように導いてあげているのです。一人でも多くの人に、正常な状態に戻れるようにと思っています」

「自分の精神状態が完全に安定しているときでないと、そう簡単には、苦しみくしみの蟻地獄あみじごくに落ち込んでしまった魂を救い出すことはできないぞ。完全に自我が消えていれば、何の影響も受けないだろうが、自分に何らかの欲望や執着が残っていると、そこに迷っている人の意識が同調して共振を起こして、自分もその意識に飲み込まれてしまう危険性があるんだ。亜希子の心は元は純粹じゆんじゆんだけど、まだ悲しみの感情が奥深くに眠って

いるから、気持ちがからっと晴れていて気分が良いときでない、この間のように暗い世界に引き込まれてしまう危険性があるんだよ」

「あなた、分かります。この間は、バスを降りたとき小雨が降っていて、その後バイクタクシーで行ったので、足が濡れてしまっていました。身体が冷えていて、メモリアルに入るのも気乗りがしませんでした」

「そういうときは、ああいう場所に行っては駄目だよ。季節の循環や、天候の変化にはできるだけ同調しろよ。それに逆らうような行動するのは駄目だよ。この世界で生きるときは、自分自身を大自然と調和させるように生きなくてはね」

「はい、よく分かりました。やはりあなたがいらっしやらないと、わたくしは不完全ですわ」

「距離は関係ないよ。永遠に生き通しなのは意識だけだから、肉体の姿に捕らわれては駄目だ。それから、祐子はどうしている？」

「お姉様は奇跡を起こされたのですよ。もう私たちの手の届かない方になられてしまったように思います。クツとブチが衝突寸前の状態になったとき、空に舞い上がられて、人々の頭の中に平和な国を創ることを話し掛けられ、前の日に戦闘で死んだ人々を生き返らせました。お姉様はどこまでもお優しく、全ての人を愛されています。人々はお姉様のことを女神様として崇めています。しかもこの国のブチ族とクツ族の間の氷河を溶かしてしまわれ、戦いに疲弊した、その日の糧にも苦しんでいる人々の生活を元に戻し、更にそれ以上にするため、フルマという協同組合的な企業を立ち上げられ、日夜努めておられます。今では大統領も一目置いていて、フルマは国の発展を担う柱になりつつあります。こんな短期間にこれだけのことをやっておしまいになったのです。わたくしも、お姉様も、あなたのことを深く愛しています。いつか3人が一緒になれるときが来ると、信じて励んでいますわ」

「亜希子、僕も君たちのことを心から愛しているよ。僕は現在北海道に来ているんだ。これから暫くはここで生活することになる。愛子は東京に残って、原さんと同じアパートに部屋を借りたよ。君も知っているとおり、来年からロシアに留学することになりそうだ。オーラビジョン・

システムの売り上げは鰻登りだよ。今年度の売り上げは300億円を超える見込みだよ。人と設備の増強が間に合わないほどだよ。原さんは今月から、社長業務を副社長に任せている。彼は次の製品を開発しているんだ。原さんの話では経済界が注目し始めていて、もう既に今年のビッグニュースの一つにノミネートされているらしい。利益が出すぎるので、公正取引委員会が動き出したなどと揶揄する新聞社もあるよ。現時点、受注残は5000台に達しているんだ。今月の生産が3000台のペースになってきてもまだ受注残が増加している。この勢いで行くと、年度末に受注残を解消させるためには月産10000台程度までアップさせる必要があるそうなんだ」

「原さん達も頑張っているのですね。身体を壊さないように、原さんにお伝えください。あなた一つ質問があります。わたくし最近一人で居ることが多い為でしょうけれど、いろいろなことを考えてしまうのですわ。考えている内によく分からなくなってきたことがあるのです。それは、この世の中には見えない世界のことを説明している沢山の教えがありますでしょう。そしてその教えがそれぞれ、違うことを説いていますでしょう。しかも、沢山の人たちがその異なった教えに従って、修行したりして、全く別のやり方で、同じように身体の具合が良くなったり、悟りを開いたりしていらっしやいます。どうしてそういうことが起きるのでしょうか？この間のジェノサイド・メモリアルで、わたくしが見た恐ろしい霊達の姿も、あなたが現れたら消えてしまいました。どうしてそのようなことが起こるのでしょうか？どうしていろいろなタイプの聖人がいらっしやって、それぞれ全く違った方法で真理を悟り、それぞれに天国に還ったとされているのでしょうか？キリスト教、イスラム教、佛教、日本神道、道教、ヨガ、気功、そのほかいろいろな教えが無数にあります。そして、物質世界の宇宙とマイクロ世界、現代科学、それを一元的に説明できているどんな教えも、世界中どこにもありませんが・・・この世界の全ての現象を説明し尽くせると称している宗教団体でも、他の矛盾するように見える宗教や、思想を誤ったものとして、排他的に扱おうとしていますし、科学で実現が可能な限界を説明し尽くしていません。こ

れはどうしてなのでしょう？」

「どうしたんだ？急に理詰めになって、亜希子らしくないじゃないか。あまり考えない方がいいよ。僕にもまだ完全に分かっている訳じゃないんだけどね、こういうことじゃないかな。人の意識の力は無限で、無限の変化が可能、無限の表現力がある。そして、無限の創造力があるんだ。それは核心に至った場合だけだね。その核心に至る道も無数にある。要はどれだけ、深く、真剣に、純粹に、無私の状態で希求できるかに掛かっていて、その方法や手段は関係ないと思うんだ。勿論初めの段階で方法論的にぶれの生じやすい手法を用いると、なかなか純粹・無私の状態になれないからね。だから、初めは手段の選択、つまりどんな教えに従うかが大切になるけどね。いずれにしても核心に至るためには、一旦こうと決めたら、その道をどこまでも突き進む必要がある。ある道を行くと、100万年かかる、ある道を行くと1万年、ある道を行くと100年、ある道を行くと1年で到達できる。そんな無数の道がある。それはいずれも核心に至る道で、誰でも自由に選べるんだ。普通の人が生きている道もいずれは核心に到達する道だと思うよ。多分何百万年も掛かるだろうけどね。何度も生まれ変わってね。だから、道を選ぶのは大切なんだよ。だけど、必ずしも最短距離の道を生きて、急いで本当の自分自身に到達する必要はないと思うよ。のんびり行程を楽しみながら生きてゆくというのも一つの方法だよ。焦る必要はないだろう。だって、そうじゃないか。永遠に生きているんだから、100万年掛けて、あらゆる世界を体験できたらどれ程楽しいか知れない。だけどね、一つだけ気を付けておかなければならないことがあるんだ。死んだ後のことだよ。死んで少しすると自分の記憶や思考は消えてしまうんだ。意識だけが残っている。だから、生きている間に普通に生活して、美味しいものを食べ、楽しい映画を見たり、スポーツをしたりして楽しんで生きているだけの人は、死んだ後も同じような生活を続ける。そして、ある時期になると、自己の本体が気付きを与えて、また生まれ変わってくる。それを繰り返すだろう。少しずつ、少しずつ進歩しながらね。何も無い間はそれもいいけど、何か急激な異変に遭遇したとき、その人は自分の本来の姿を見

失ってしまう危険性が大きいんだ。自己の意識を失って、存在として映し出された個が失われ、全体の意識の中に包含されて仕舞うことになると思うんだ。そうすると、次の誕生の時に前回生きていた時の状態まで意識が戻れなくて、動物的な意識として生まれ変わったり、あるいは酷い場合は、人間なんかの一つの細胞の意識になって生まれ変わったりすることになってしまうかも知れない。永遠の命には違いないけどね。それはまた何千万年も後ろに戻ったということになると思うんだ。人間が生まれるときに、受精から胎児になる段階で、人類は進化の歴史を凝縮して生きることは知っているね。全ての過去の経過が本来の自分自身の中であって、それが誕生の時に映し出されてくる。過去に経験したプロセスを経てきて、意識にそれが刻まれているからだと思うんだ。そういうプロセスは意識の連続性によって起こるのだと思う。だから今言ったようにもし、その連続した意識が途中で途切れてしまうと、そこで中断してしまうから、また過去に意識が覚醒して存在していた段階に戻り、ある場合は、単細胞生物に、ある場合は魚に、ある場合は両生類に、そして、ある場合は哺乳類になって生まれてくるように思う。進化とは意識の連続性の結果で、意識のレベルによって、次に誕生する世界も変わってくるんだと思う。それは、この世界が元存在を展開して写し出した世界だからできることだと思う。本来の自分自身は宇宙であり、無でもある。無限大と、無との間をいたりきたりしている存在で、次第に膨張して無限大になり、次第に収斂して無限小となるリズムで振動している存在だと思う。そこから映し出される個としての存在の影が、自分の意識の状態によって特定の存在の形を取るのだと思う。これはあくまで、物質的な一面で、精神的な面もそのような形になっていると思うんだ。みんな、本来の自分自身に至るプロセスの選択に過ぎない。だからどの宗教に属している人も、どんな考えを持っている人も、それぞれに尊重しなくてはいけないよ。ただし、同じ道でも反対方向を向いて歩いている人たちもいることも事実だから、もしそういう人達に出会ったら「向かっている方向が違っているよ」と教えてあげるといいね。だけど、君がしっかりしていないと、その人にその道に沿って付いてくるように導

かれてしまうからね。その向かっている道によってそれぞれ、天国だとか、地獄だとか、人道だとかという名称が付けられているんだ。そして、それらはそれぞれに写像の中の一つの次元を構築している。意識の作り出す次元だから、それがあたかも存在しているように顕現してくる。もし、その次元に入り込めば、まさにそこはリアリティの世界になるんだよ。分かるだろう。意識の働きは開けば無限大、閉じれば無限小になるということだ。それは良くも悪くもないプロセスなんだ。反対方向に向かうものも存在が可能なんだ。全体としては調和しているんだ。どう、少しは理解した？」

「あなた、難しいところもありますが、わたくし大分解ってきました。でも、どうしても死んだ後のことが具体的にはっきりと理解できません。何だか、いろいろな形が無数にあって、どれが本当の死後の世界の形なのかまるで見当が付きません。ただ一つ、死んだ人の魂がその場に縛り付けられていて、動きが取れないのは哀れで、そこに縛り付けている紐を解いて自由にしてあげたいと思うのです。この考えは間違えていないでしょうか？」

「その考え自体は正しいと思うよ。一つの考え方のポイントは、停滞は本来の形ではないということ、自分の意識が正しいと認識する方向に向かって動くようにすること、これが重要だと思うんだ。今日、死後の世界について、君に説明し尽くすことは難しいけど、これから、僕もその世界を覗いてゆかなくてはならなくなりそうだから、そうしたら自分の経験と洞察から、分かったことを順番に説明してゆくよ。例えば地獄だとか、天国だとか、そして、そこから何が生まれ出るとかかね」

「あなた、よろしく願います。わたくしにはあなた以外に信じられる方はありませんから」

「亜希子、全ての人の神性を観なくては駄目だよ。全ての人、と謂うより全ての存在は、尊いんだからね」

賢はそこで意識を亜希子から切り離れた。久しぶりに、この世界のことを考えてみて、その確信が更に強くなっていることを自覚した。しかし、それはまだ無限に続く探求だということも分かっていた。それが意識の

特性だと思った。もう日が傾いてきていて、部屋の中が薄暗くなりはじめていた。この部屋が夕日を受けても、あまり明るくならないのは、多分居間が東向きの所為だと賢は思った。ふと気付くと、一人の女性がキッチンの薄暗がり立っている。灰色地に薄緑と赤の紅葉模様が入ったブラウスを着て、薄い藍色のスカートをはいた細い体つきの女性だ。髪はポニーテールに束ねていて、一見若そうに見えるが、よく見ると目の廻りと顎の辺りの肌を感じから、既に50歳に手が届いているように思われた。女性は賢の方をじっと見つめている。賢がその女性の方を見て言った。

「どなた様ですか？」

「*****」

女性は黙っている。

「どこから、入って来たのですか？」

「ず〜っと・・ここ〜に住んでいます〜」

賢には、そう聞こえた。やっと聞き取れる声だ。妻の亡霊だと思った。

「こちらに来ませんか？お話をしましょう」

亡霊は音もなく、すっと賢の近くまで来た。辺りの雰囲気はひんやりしてきたような気がする。文字通り背筋が寒くなってきた。

「あなたは、亡くなったこの家の奥様でしょうか？」

「わたくしは〜、この家〜の者です〜・・が、死んでなど〜いません」

「そうですか。ご主人はどうされましたか？」

「主人は〜、今〜、留守に〜しています」

「どちらにお出かけですか？」

「写真を〜撮りに〜行きまし〜たあ〜。この〜辺りは〜自然が〜一杯で〜、写真を・・撮るのに〜向いて〜います〜」

「あなたは、ご一緒に行かれないのですか？」

「わたくしは〜、絵を〜描きます〜。写真は〜撮り〜ませ〜ん〜。でも〜、もう〜この辺りの〜景色は〜、全部〜描いて・・しまいました〜」

「それはすばらしいですね。一枚、拝見させて頂けますか？」

「お恥ずかし〜いですが〜、それでは〜、1枚〜持って〜参ります・・」

・」

そう言うと、幽霊は廊下に抜けるドアを突き抜けて、消えてしまった。賢は暫く待っていた。いつまで経っても戻って来ない。賢は幽界に意識を切り替えてみた。幽界では先ほどの暗さから、夕暮れのやや明るい感じに戻っている。昼間見た雰囲気とは全く違って、部屋の中が藤垣の言っていたような雰囲気に変化していた。幽界のここの場が全くこの家に重畳していた。亡くなった妻の意識が作り出した空間であることが分かった。妻の執着の念が異常に強いので、空間に現象界と全く同じものを作り出したのだと思った。賢は、これは一筋縄ではいかなそうだと思った。漸く妻が姿を顕した。辺りは真っ暗にならず何時まで経ってもうす暗いままだが、妻の姿もまだはっきり確認できる。

「お待たせ～しました～。これがわたくしの～一番～気に入っている～絵です～。お見せ～するのは～、お恥ずかしい～ですわ～～」

賢に1枚のキャンバスを差し出した。その絵に描かれている景色は一見してこの辺りの風景とは異なっていた。そこにはビルの建ち並ぶ町並みと背景に海が描かれている。どう見ても由仁の景色ではない。

「奥さん、これはどこの景色ですか？」

「丘の～上から～、海を眺めた～景色ですわ～。とって～も～奇麗だったの～、描いたの～」

「そうですか。お上手ですね。海が美しいですね。ここの景色をお好きなんですね。もう、ずいぶん長い間住んでおられるんでしょう？」

「結婚してから～、ず～っとですから～、かれこれ～20年に～なりますわ～ね～～」

賢は妻の倒錯した意識に、気付きを与えられる可能性を感じた。賢は空腹感を覚えてきた。

「奥さん、わたくしは遠方から来ましたので、今晚こちらにお泊め頂けないでしょうか？ご主人が泊まってゆくようにとおっしゃっていただきましたので……」

「そうですか～、主人は～暫く留守に～しておりますけど～、主人の～お友達で～いらっしゃるのでしたら～、安心ですから～、わたくしも～

大歓迎です～わぁ～～。それでは～食事の支度を～しましょう～～」

言っていることも、先ほどと矛盾している。

「奥様、今日、空港で買ってきたものがありますから、僕はそれを食べます。奥様の分だけご用意になってください」

「そうですか～？何の～おかまいも～できませんで～、申し訳～ありませんね～～」

そう言うと、妻はキッチンに入って行った。賢は意識を現実界に戻した。もう手元も確認できないほど、すっかり暗くなっている。賢は明かりを点け、急いでショルダーバッグからクロワッサンと豆乳を1パック取り出してその場で食べ始めた。妻は姿を見せない。明かりを点けている所為かもしれないと賢は思った。食事を終えて、豆乳の空きパックをパンの空き袋に入れ、ショルダーバッグに戻してから後ろを振り返ると、そこに妻が立っていた。賢は背筋に冷たいものを感じて鳥肌が立った。妻は夜着に着替えていた。

「お客様～～、パジャマは～お持ちに～なりましたか～～？」

「はい、持っています」

そうは言ったものの、パジャマは主人の寝室のクローゼットに入れてしまったのだ。賢は話を逸らした。

「奥様、お願いがあります。僕は、明日早くに、会社に出社しなくてはならないので、早めに休ませて頂きたいのですが」

「勿論～ですわ～。主人が～留守ですので～、主人の～ベッドを～お使いに～なったら～よろしいですわ～～。お客様～～、いつまで～お泊まりに～なりますか～～？」

「ご主人が留守の間、ずっとです」

妻は嬉しそうな顔をした。客間があることは念頭に無いようだった。明かりを点けて廊下に出ると、妻の姿が見えなくなった。賢はショルダーバッグを手にして主人の寝室に入った。クローゼットから先ほど収納したパジャマを出して着替えると、新しい下着とタオルを手にして直ぐに浴室に向かった。妻の趣味の部屋の前を通ると部屋の中から、カタコトと音がする。妻の亡霊が居るのだと思った。しかし、亡霊は姿を顕さな

かった。賢はシャワーを浴びた。一気に疲れが吹き飛ぶ思いがした。浴室から出て再びパジャマを身につけ廊下に出ると、妻の寝室の扉が少し開いている。賢は妻の亡霊が寝室に移ったのだと思った。賢が主人の部屋の近くまで行くと、妻の部屋のドアがぱたんと閉まった。賢は主人の寝室に入ると、直ぐにベッドに潜り込んだ。疲れが全身に心地よい休息を与えてくれた。早めに休んだためすっかり疲れが取れた。

翌朝、賢はすっきり目覚めることができた。妻の亡霊の姿は何処にも無い。賢は洗面所に行って出社のための身繕いを整えた。すがすがしい朝だった。

札幌

札幌支店は12階建てのビルの3フロアを使っていた。残りは北海道支社の管轄だった。駐車場はビルの地下に設けられていて、既に賢の駐車場所も指定されていた。賢はそこにレンタカーを停めると、エレベータで支社の3階のフロアに上がった。受付には電話機が置いてあるだけで誰も居なかった。電話機の横に置いてある案内から総務部を探し、電話を掛けた。女性の声で応答があった。

「はい、東領製作所・札幌営業所でございます。どちらさまでいらっしゃいますか？」

「今日からこちらに赴任することになった内観です」

「おはようございます。ご苦労様です。今そちらに参ります」

非常に感じのよい応対だった。少しして東領製作所の制服を着た、顔立ちが整ってスタイルの良い、25、6歳の女性が姿を顕した。

「内観部長でいらっしゃいますか？」

「はい、そうです。部長じゃなくて、部長付です」

「はい、でも普通、部長と呼ばせて頂いております。内観部長席は用意出来ています」

そう言って女性は中に入って行った。賢も後に従った。仕切り壁で囲まれたオフィスに入ると、手前に空席の机があり、その横に段ボール箱3箱が積み上げられていた。賢は荷札を見てそれが自分の送ったものだと

思った。一番奥の窓際の席に小柄で頭の禿げた背広姿の男性が座っていて、その前に二つの席の島があり、男性3人、女性5人が席に着いていた。全員一斉に賢に視線を投げ掛けた。女性は禿頭の男の席の近くまで賢を誘導し、頭を下げるように身体を縮めて、その男のすぐ前の席に着いた。どうやら秘書の役目をしているように思える。賢が近くに来ると、

「おい、全員、集まれ」

禿頭の男が言った。席に着いていた者達は一斉に立ち上がって直ぐに、禿頭の男の席の前に集まった。

「今日から、うちに来ることになった、内観君だ。本社で失敗をやらかして、うちに来ることになった。俺付きだ・・・おい内観、挨拶しろ」
賢は禿頭の男が安芸津だということが分かった。

「本社から転勤になりました、内観と申します。よろしく願いいたします」

「なんだ、それだけか、挨拶もろくにできないのか、えっ？」
「済みません。それでは、自己紹介を少々させていただきます。わたくしは、MIプロジェクトの推進責任者の役を拝命しておりましたが、このたび、全国に先駆けて札幌に建設することが決まりましたバーチャルシステム館の立ち上げ支援の命を受け、こちらにお世話になることになりました。バーチャルシステム館の建設はまだ少し先のことですが、それまでの期間に、建設のための準備の推進と、運用のための基盤の確立を計りたいと思います。よろしく願いいたします」

「そんなことは分かってる。おまえ自身のことを紹介しろってんだよ。おまえは頭がいいって聞いてたけど、とんだ食わせ者だな」
安芸津の嫌みたっぷりの罵声に、全員神妙な顔をしている。

「分かりました。それでは、わたくし自身のことを少し紹介いたします。わたくしは35歳独身で、昨日由仁に引っ越して参りました。アメリカのフェニックス大学を卒業して、WEC社に勤務しておりましたが、MIプロジェクトを推進することを目的として、本年1月1日付けで当社に入社しました。よろしく願い致します」

「てめえは、いちいち言われなくちゃ話ができないのか？ええっ？趣味

とか、無いのか？彼女がいるとかあるだろう」

「趣味は特にありません。そのほかの個人的なことは、この場では遠慮させていただきます」

「面白味のない奴だな。まあいい。おまえの席はあの、入り口のところだ。どうせろくな仕事はできないだろうがな・・・全員、仕事に戻れ」賢は思ったより単純な安芸津という男に、寧ろ安堵感を覚えた。席は片袖の机で、WE C社に勤務していたときより小さい机だった。出発前に発送した段ボール3箱の書類が収まるかどうか疑問だった。賢の隣は先ほど受付に来てくれた女性の席だった。その対面席に40歳前後の男性の席があり、その隣が賢の対面席になり30歳前後の鼻が高く、目の大きな色白な美人の女性が座っていた。安芸津の前には二つの机の島があり、もう一つの島には男性2名、女性3名の席があった。賢が指定された席に着くと、先ほどの女性がやって来た。

「内観部長、私は奥日美優です。安芸津部長の秘書と庶務を兼務しています。よろしくお願ひいたします。分からないことがあったら、何でも仰ってください。今から、社内の施設などを説明したいと思いますが、お時間は大丈夫ですか？」

安芸津の酷い扱いとは対照的に、奥日は親切に話し掛けてくれた。賢は礼を言って、奥日の後に附いて支社内を一廻りすることにした。奥日は先ず賢を支社長の部屋に連れて行った。支社長の秘書は賢に、「お待ちしていました」と言った。

支社長は蝦夷原という名前の50歳ほどの男だった。

「お一人ですか？安芸津さんはどうしたんですか？」

「奥日さんに連れてきて貰いました」

「そうですか。MIプロジェクトも大変ですね。わたしどもも、あのバーチャルシステム館がどういう存在なのか計りかねていますので、是非よろしくお願ひします。何か不自由などありましたら、仰ってください。協力いたします」

賢は計画の概要を説明して支社長室を出た。奥日は、その近くの総務部長の席に賢を連れて行った。総務部長は神佐川という定年間近と思われる

る男で、賢の姿を見ると微笑んで対応をした。

「MIプロジェクトは世界で初めてのことに挑戦しているんでしょう。そんなに簡単に進むとは思えません。北海道がその先導役を担うというのは、実に面白いことだと思います。是非頑張ってください。内観部長は支店の方に席を置かれたようですが、支社としてどう取り組むか、教えて頂かなくてはならないことが一杯あります。ご指導よろしく願います」

賢は、安芸津とは随分違う対応だと思った。支社長からも総務部長からも、敵意の波動は感じなかった。次に支社の経理部長の所に寄った。経理部長の中岡は非常にクールな見方をしていた。やはり念頭にあるのはプロフィット（収益）のようだった。利益を出してこそプロジェクトは成功するという賢の考え方にマッチしていた。賢はこの「経済システム下では」という条件を付けていたが、中岡は、「支社として」という考え方だった。賢は当然のことだと思った。各部長を一通り訪れた。どの部長も、批判的な言葉を口にする者はなかった。賢は支社内を周りながら、奥日から什器類の説明を受けた。着替えのロッカーや、トイレや厨房の位置などを教えて貰い席に戻った。机や事務用品など、業務に必要なものの準備は的確に行われていた。机の上にはPCも用意されていて、既に社内ネットワークに接続されていた。賢はIDファイルをコピーし、パスワードの設定をするだけでそのほかの一切の設定なしに、東京と同じPC環境で業務を開始することができた。荷物の整理が済むと丁度昼食の時間になった。東京から送ったファイルは全部引き出しに収めることができず、入り切れなかった書類は机の右斜め前の隅に山積みにした。昼食は2シフトでこの日は11時45分から12時半までの番だと奥日が説明してくれた。特に合図はなく、時間になると銘々外に食べに行くとのことだった。賢は奥日から貰った座席表で全員の名前と座席位置を即座に記憶してしまった。自分の席の前に座っている女性は雪坂康子という名前だった。奥日以外の誰からも紹介を受けていない。賢は誰に対しても「あの一」と呼び掛けて、話し始めることにした。早速前に座っている女性に話し掛けてみた。

「あの一、食事は皆さん、どの辺りで食べるのでしょうか？」

前に座っている女性は少し微笑んで言った。

「はい、このビルを出て右手に100メートルほど行くと、レストラン街があります。会社の人たちは皆さん、そちらに行っているようです。よろしかったら、今日はわたしがご案内します」

そのとき安芸津が席を立て賢の席の後ろを通り掛かった。

「雪坂、そいつにゃあ気を付けろよ。すけこましで有名だからな。女だったら見境無いらしいぞ」

吐き捨てるように言った悪意の籠もった声に、食事に出ようとしていた者達は一瞬安芸津の方に視線を向けた。しかし、その声が聞こえないようなふりをして銘々席を立て出て行った。賢は黙っていた。雪坂は意識してか、全員が居なくなってから、少し時間をおいてオフィスを出た。賢は雪坂の後に附いて行った。エレベータの前には他の部署の2人の女性が待っているだけだった。賢と雪坂は次に降りて来たエレベータに乗ろうとしたが、待っていた2人の女性が乗ると満員になってしまった。その次に来たエレベータで漸く地階に降りることができた。外に出ると雪坂が言った。

「部長、今日はレストラン街と反対の方に行ってみましょう。まだみんなと一緒にするのは、控えた方がいいようですから」

「雪坂さんですね。心配要りませんよ。僕は何も感じませんから」

「でも、今日は止めておきましょう」

「お任せします。よろしくお願いします」

雪坂は先ほど言ったレストラン街とは、逆の方向に向かって歩き始めた。賢は後に附いて行った。道を左に折れて暫く歩くと雪坂は船宿という居酒屋に入った。その店は空いていた。客が一人も居なかった。雪坂は座敷に上がるように賢を促した。狭い座敷だったが、入り口からは死角になる。席に着くと店主が姿を見せ、威勢良く

「らっしゃい。姫、今日は何にしますか？」

と言った。どうやら雪坂はこの店の常連のようだ。

「親父さん、今日は何？」

「サンマの塩焼きと茄子の煮付けす」

「それでいいわ。部長はどうされますか？」

「僕もおなじもので」

「2人前お願いね」

「へい、まいどあり」

店員の女性が茶の入った湯飲みを2つ持って来た。

「酷い人でしょう。私たちはもう慣れたけど。初めての人にあんな態度をする人は、そうはいないでしょう」

「僕に何か落ち度があるのでしょうか。全然気にしていませんよ」

「部長、我慢しないでがつんとやり返せばよかったですよ。あのおじさん、強い者には弱いんですよ」

「特に、どうってことないですよ。我慢なんかしていません」

「だって、さっき言った「すけこまし」なんて汚い言葉、普通の人じゃ使わないでしょう。ああいう下品なおじさんは虫ずが走ります」

「もう止しましょう。あの方も、何か気に障ることがあるのでしょうか」

「わかりました。でも、内観部長がいつまで我慢できるかって、みんなで言っているんですよ。今日は部長の歓迎会があるんです。きっと誰も何も言わないでしょう。多分終業時間ぎりぎりになって、あのおじさんが嫌みたらたらで直接部長に言うと思うんです。その前に誰かが言おうものなら、また瞬間湯沸器の栓が吹き飛びますからね」

賢は可笑しかったが、笑わなかった。

旬のサンマは格別だった。賢は食事をしながら、雪坂の顔をしげしげと見つめた。姫と呼ばれた雪坂は、色が白く透き通るようで、きつい言葉遣いさえなければ、まさに姫君を思わせる女性だった。食事を終わるとふたりはオフィスに向かって元来た道に戻った。支社のビルの前で、レストラン街の方角から3人の部下の男性と一緒に戻って来た安芸津と顔を合わすことになった。

「おう、早速どこかにしけ込んだのか？それにしても手が早いな」

賢はにっこり笑って言った。

「雪坂さんに船宿という店に連れて行って貰ったんです」

「ほか、あそこは飲み屋だ。まさか、昼間から一杯やったんじゃないだろうな。あーあ、そういうことか。相手が相手だからな」

安芸津は雪坂のほうを見てにやっと笑った。雪坂は言った。

「部長、ふざけないでください。女性に対して失礼です」

「おお、こわ。女は怖いわ」

賢は黙って、5人と一緒にエレベータに乗った。

「おい内観、おまえ英語が話せるんだってな。ちょっと話してみろ」

エレベータの中で安芸津が言った。

「Usually, I don't speak official English to any intelligent Japanese gentlemen.」（通常、私はどんな知的な日本人の紳士に対しても正式な英語を話すことはありません）

賢が早口で言った。雪坂は大きな目を見開いてにやっと笑った。他の4人の男性は意味が分からないようだった。それからオフィスに入るまで安芸津は何も言わなかった。賢は席に戻るとPCをONし、メールを確認した。10通ほどのメールが届いていた。最初のメールは梓からだった。

内観部長殿

無事赴任されましたでしょうか？心配いたしております。

内観部長のことですから、大丈夫だと思っておりますが、やはり心配です。

契約書は、保証人欄に署名し、実印を押して、速達で送りました。

今日中にそちらに着くと思います。

そちらの職場は如何ですか？みんな親切ですか？

身体に注意してください。食事は3食きちんと摂ってくださいね。

私はできるだけ早くそちらに移れるよう、今久保蔵さん、および総務部長と談判中です。早くお逢いしたいです。

田辺 梓

賢は早速返信を書いた。

田辺部長殿

心配してくれて、ありがとう。

全て順調です。昨日、無事借家のセットアップも終わり、初めの一晚を過ごしました。今朝は爽快です。

こちらの方達も皆親切です。

大丈夫だから心配しないでください。

それより、田辺部長と楠木部長の業務負担が増してしまったのが気懸かりです。そちらこそ、無理をして身体を壊さないように注意してください。

また、メールします。

内観 賢

楠木のメールもあった。プロジェクトの引き継ぎ結果について書いてあった。特に大きな問題は無いようだった。それ以外は全て、元の部下からのメールだった。皆、賢の無事な勤務を祈っていた。賢はありがたいと思い、一人一人に丁寧に返信を書いた。メールの処理は直ぐに片付いたので、早速バーチャルシステム館の建設計画の資料を引っ張り出して検討を始めた。机の上に山積みした書類が邪魔になる。それを見て雪坂が言った。

「内観部長、書類が入りきらなかったら、私の机の引き出しに入れてください。大きなファイル入れが空のままですから」

「でも、君も書類を整理するとき、困るだろう」

「いいえ、私は完全にペーパー・レスで業務を推進しています。ご覧ください」

そう言うと、雪坂は一番下のファイル入れの引き出しを開けて見せた。賢の席からは見えなかったが、からからという軽い音で、賢は中が空であることを認識できた。賢が微笑んでいるだけで、覗き込まないので、雪坂は諦めて引き出しを閉めようとした。

「ありがとう、それじゃあ、この机の上に出てしまった分をお願いしま

す」

賢の言葉に、雪坂は片目でウインクをして「はい」と応えると、賢の机の上のファイルを全部自分の引き出しに収めてしまった。

「内観部長、これは引き出しの鍵です。二つありますから、一つお渡ししておきます。私が居ないときでも、自由に開けて、利用してください」
そう言うと、雪坂は身体を乗り出して、賢に鍵を渡した。

「ありがとう。できるだけ、君の居るときに利用させて貰うよ」
賢はPC上でプレゼンテーション資料作成ソフトを用い、説明文形式で資料を作成し始めた。賢のキーボードを叩く早さは、並ではなかった。そのスピードに雪坂も奥日も目を丸くしていた。奥日の前に座っている男性は眼鏡を掛けた主任の田野村誠だった。猫背で鼻が低く、風采が上がらないが、ブルーのワイシャツに派手なピンク色のネクタイを締めている。田野村も賢のキータッチが気になると見えて、ちらりちらりと様子を伺っている。やがて5時半の終業時間になった。安芸津が大きな声で言った。

「おい内観、おまえの歓迎会をやってやるから、そのつもりで支度して待ってろ！」

賢は、雪坂がニコッと笑ったのが分かった。賢は大きな声で応えた。

「はい、ありがとうございます。よろしく願います」
その声が安芸津より大きかったので、みんなビクリとした。

部員は銘々席を立てて帰り支度をした。奥日が賢の所にやって来て、自分が案内すると言った。奥日は全員が席を立つのを待って、オフィスの各所を確認してから、着替えにロッカールームに入って行った。賢は奥日が出て来るのを待った。奥日は白のシャツの上に臍脂のチェックの上着を着て出て来た。先ほどまでは目立たなかった口紅もはっきり分かるように付けている。賢は奥日に導かれて裏道を歩き、賑わった通りに出た。

「ここがすすき野です」

奥日と言った。すすき野はネオンが輝き華やいだ街だった。大勢のサラリーマンが繰り出していた。紅葉傘という料亭の2階に宴席が用意され

ていた。奥日は賢を部屋まで案内した。襖を開けると、向かい合った2列の席が用意されていて、既に安芸津以外の全員が揃っていた。真ん中に2席、端に1席開けてある。賢に真ん中の席に着くように案内すると、奥日は端の席に着いた。賢の隣には稲城という課長代理が座っている。その隣の端の席に雪坂が居た。もう片方の端には主任の田野村が座っている。反対側の席は雪坂の側から、江梨という小太りで体格のいい若い女性、その隣に保木という40歳くらいに見える地味で大人しそうな女性、三田村という目のつり上がった50前後性格のきつそうな女性、亀田という小柄で痩せた若い男性、そして端が奥日だった。座卓にはお通しと思われる蛸の酢味噌和えが小鉢で出されている他は、箸、匙、空のグラスとビール瓶が並べられているだけだった。10分しても安芸津は現れなかった。奥日がスマホを掛け何か話していたが、電話を切って言った。

「部長はあと10分ほどで見えるそうです」

だれも、何とも言わなかった。丁度10分して安芸津が入って来た。

「おう、待たせたな・・・何だ、この席は、これじゃ、酒がうまくないだろう。男、女、男、女にしろ」

安芸津がそう怒鳴ると、全員慌てて席の入れ替えをした。賢はただ座って見ているだけだったが、あまりの手際の良さに何か不自然さを感じた。結局、賢、田野村、奥日は動かず、安芸津が賢と向かい合った席になった。賢の側が、稲城、雪坂、賢、三田村、田野村の順となり、反対側が亀田、江梨、安芸津、保木、奥日の順になった。

「よし、これならいいだろう、一応元の社長付き様はど真ん中だし、男、女、男、女になっているし、それじゃあ、酒を頼め」

江梨が声を掛けると、仲居が2人、生ビールを持って現れた。全員にジョッキが行き渡ると、課長代理の稲城が立ち上がって乾杯の音頭をとった。

「それでは、皆さん、新しく我々の部にお見えになった内観部長を歓迎し、今後のご活躍を祈願して乾杯をしたいと思います・・・内観部長、ようこそ札幌支社にお越しくださいました。我々一同内観部長を歓迎い

たします。これからは我々のご指導をよろしく申し上げます。それでは内観部長の歓迎と前途を祝して、乾杯！」

「乾杯！」

皆一斉にジョッキを傾けた。乾杯の発声が終わると、次々に料理が運ばれて来た。江梨が安芸津に向かって言った。

「部長、挨拶をお願いいたします」

「俺じゃないだろう。元社長付きが挨拶するんじゃないのか？英語もうまいし、英語で喋って貰ってもいいが、誰も分からないだろうから、いや雪坂は別だがな、他のやつは誰もわからないから、やっぱ、日本語でやってもらえ」

江梨が賢に向かって言った。

「内観部長、挨拶をよろしく申し上げます」

賢はジョッキを座卓に置くと、立ち上がった。

「今日は、僕のためにこのような歓迎会を開いて頂き、大変ありがとうございました。どのような部署なのかと心配しておりましたが、皆さんとても親切で、心より感謝いたします。今朝も申し上げましたが、僕はアメリカ人の母と日本人の父の間に生まれました。出生時に一旦日本国内に戻りましたので、日本とアメリカの両方の国籍を持っています。幼少の頃はアメリカのアリゾナ州に住んでいましたが、大学を卒業して日本の会社に勤務することになりました。僕は何人かの友達と一緒に最近起きた失踪事件を調査、追跡していました。詳しいことは話ませんが、その調査の過程で社長と知り合い、MIプロジェクトのリーダーに抜擢して頂きました。しかし、プロジェクトが立ち上がって暫くして、当社に対する見えない組織からの攻撃を受け、いろいろな事件に巻き込まれてしまいました。一方プロジェクトはいよいよ具体的な実行段階に向けて動き始めました。その第1弾が、札幌に建設する予定のバーチャルシステム館です。僕はその立ち上げの支援をするように社長から命令を受け、こちらに赴任することになったのです。まだ独り身ですが、精神世界のことを重要と考えて日々瞑想をしておりますので、良い機会なので、一人で静かに瞑想のできる由仁の1軒家を借りることにしました。札幌

からは少し離れていますが、静かでいいところです。皆さんも機会がありましたら、是非一度いらしてください」

賢は当たり障りのないことだけを話した。賢が頭を下げたとき、安芸津以外、全員頭を下げた。安芸津が言った。

「本社の偉い奴が、失敗をしでかしてここにとばされてきたというわけだ。おい内観、一体何をしでかしたんだ。使い込みか？それともこれか？」

そう言って安芸津は左手の小指を上げた。賢は座ると、少しも悪びれずに言った。

「僕にも分からないんです。考えられることは、海外出張で行った調査結果が、トップの期待にそぐわなかったのじゃないかということです。海外の精神改革があまり進んでいなかったと、感じたままを報告しましたので」

「へえ、その報告のどこが悪いんだ。他に理由があるんじゃないのか？」

「あるかも知れませんが、僕には分かりません」

「まあ、そのうち分かるってもんだ。おまえも、よほど女運がいいと見えるな、隣に座っているのは、何年か前にミス北海道になった雪坂姫だぞ。やたらに触れるでないぞ」

雪坂はいきなり左手で賢の右手を握り、見えるように少し挙げて言った。

「安芸津部長がそうおっしゃるので、わたしの方から内観部長に触ることにしました」

「姫、俺には指一本触れさせないくせに、いきなり内観の手を握るのか？やっぱり昼間、何かあったな？」

賢はただ微笑んでいた。雪坂が言った。

「安芸津部長が意地悪を言えば言うほど、わたしは内観部長に優しくしちゃいます」

雪坂のジョッキは半分ほどになっていた。

「分かった、分かった、姫にはかなわないな。もう、酔ってるのか」

「酔ってなんかないわ。ねえ、内観部長」

そう言うと雪坂は内観の手を自分の前まで引っ張って、両掌で賢の右手

を包むように握った。さすがに賢は手を引っ込めた。雪坂は賢の方を向いてにっこり笑った。全員笑いながらふたりを見ていたが、賢が手を引いたので、がやがやと話し始めた。江梨が立ち上がって言った。

「皆さん、内観部長が自己紹介をされましたから、今度は私たちが順に自己紹介をしようと思います。先ず亀田さんからお願いします。」

江梨が座ると亀田がさっと立ち上がった。

「亀田信彦と申します。27歳です。データベース担当です。独身です。僕は東京の出身です。一昨年札幌支社に転勤になりました。趣味はラジコン飛行機です。最近はドローンにも手を出し始めました。でもやっぱり飛行機のダイナミックな動きには敵いません。北海道は飛ばせる場所があるので休みが楽しみです。両親は東京に住んでいます。兄弟は兄が横浜に居ます。僕も今度のMIプロジェクトにはとても興味を持っています。バーチャルシステム館が出来るのを楽しみにしています。よろしくお願いします」

亀田が座ると江梨が再び立ち上がった。

「わたしは、江梨理恵と申します。札幌支店の福利厚生を担当しています。年齢は内緒です。まだ独身です。内観部長、わたしもお嫁さん候補に入れておいてください。趣味はお花と少林寺拳法です。矛盾するようですが、これが良く合うのです。両親は健在で、現在両親と同居しています。よろしくおねがいします・・・それでは次は安芸津部長お願いします」

江梨が座ると、安芸津は座ったまま賢に向かって言った。

「内観、俺は安芸津だ、よろしく。以上」

安芸津の素っ気ない言葉に続いて、保木が立ち上がった。そのとき少しよろけて、安芸津の肩に手が触れた。しかし、安芸津は何も感じないかのように知らんぷりをしていた。保木は先ず安芸津に謝った。

「部長、済みません！・・・あの、わたしは保木知子と申します。資料作成担当をさせて頂いてます。もうアラフォーで独身です。趣味は読書と、音楽鑑賞です。好きな本は遠藤周作の小説です。音楽は昔のモダンジャズが好きです。MJQやソニー・ロリンズが大好きです。少し古い

ですね。それと旅行が大好きです。海外旅行は行きたいと思っていますが、まだ日本から出たことがありません。誰か一緒に行ってくれる人を探しています。よろしくお願いします」

賢は大人しそうだと思っていたが、意外に明るく活動的なので驚いた。次に奥日が立った。

「私は奥日美優と申します」

奥日は賢の方を見ると微笑んだ。

「庶務と安芸津部長の秘書業務と支店のインフラを担当しています。まだ20歳台です。趣味はポップスです。聞くのも演奏するのも好きです。プライベート・バンドのメンバーになっています。両親は函館に住んでいます。兄弟は独身の姉が両親と同居しています。私は単身でアパート生活してます。よろしくお願いいたします」

奥日は賢に向かって頭を下げた。次に田野村誠が立ち上がった。

「田野村と申します。札幌支店の人事関連の業務を担当しています。結婚して1児の父親です。札幌の北、石狩市のアパートに親子3人で住んでいます。趣味はスキーです。よろしくお願いいたします」

続いて三田村という50歳代と思われる女性が立った。

「わたくしは三田村佐和子と申します。支社全体の年金、保健、預金管理などの業務を行っています。家族は夫、長男、長女が居ます。子供たちはまだ学生です。小さいですが稲穂の一軒家に住んでいます。趣味は今はありません。本当は山が大好きです。よろしくお願いいたします」

雪坂の番になった。雪坂は立たなかった。

「わたしは雪坂康子と申します。よろしくお願いします。以上です」

それだけしか言わなかった。安芸津がやんわりと言った。

「俺のまねをするな」

「わたしは安芸津部長の、率先垂範に従ったまでです」

「姫は怖いな。まあ、いいとするか」

雪坂はジョッキに半分ほど残っていたビールを一気に空けた。次に稲城が立った。

「わたしは稲城浩一郎と申します。札幌支店の総務課長をしています。

総務の業務全般を担当しています。結婚していますが、子供はありません。趣味は写真です。現在札幌市内のマンションに住んでいます。よろしくお願ひいたします」

賢の方は見もしないでそれだけ言うと席に着いた。安芸津が言った。

「おい、稲城、客先名簿のメンテは終わったのか？」

稲城はおどおどして応えた。

「い、いいえ、まだです。今日、歓迎会があったので・・・あした・・・」

「馬鹿野郎、明日の朝必要だと言っただろう」

「済みません、この後、社に戻って片付けます。あと少しですから」

全員一瞬白けた。賢がジョッキの生ビールを飲み干すと雪坂が瓶ビールの栓を抜き、賢の前のコップになみなみと注いだ。

「内観部長、彼女はいるんでしょう？」

雪坂が賢の顔を除き込むようにして、言った。

「ええ、居ます」

「その方と結婚するつもりですか？」

「いいえ、しません。僕は恋人とは結婚しません」

それを聞いていた安芸津が言った。

「おまえ、その手で何人の女を泣かせたんだ？」

賢は黙っていた。雪坂が言った。

「安芸津部長、意地悪ばかり言わないで、もっと楽しいことを言ったらどうですか？」

雪坂は安芸津に突っかかるような言い方をした。

「おおそうだな、おい、誰か出し物をやれ・・・とは言っても、姫と奥日以外の奴は芸がないからな。おい内観、挨拶代わりに、なんかやれ」
雪坂が言った。

「部長、部長とわたし以外は内観部長も、みんなもちやんと挨拶しましたよ。挨拶代わりなら、私が先ず唄を歌います」

雪坂は立ち上がると、その場で、中島みゆきの「地上の星」を歌った。

力強い声は感動的だった。安芸津が喜んで手拍子を打った。皆、手拍子

を打った。賢もみんなに合わせた。歌い終わると全員の拍手が収まるのを待って、雪坂は言った。

「さあ、今度は部長の番ですよ」

安芸津はとぼけて言った。

「内観部長、君の番だそうだ、よろしくな」

雪坂は安芸津を睨むように見たが、何も言わなかった。賢はにっこり笑って言った。

「もう、時代が変化してきているんですよ。これからやることはもうじき、誰にでもできるようになることです。だから、こんなのは芸になるかどうか分かりませんが、まあ見ていてください。少しの間、家に帰ってきます。何か証拠の品を持ってきます。直ぐに戻ってきますから、心配しないでください」

安芸津が言った。

「おまえなあ、宴会の最中だぞ、席を外すなんて、みんなに失礼だとは思わないのか？」

「いいえ、これも芸の内と思ってください」

そう言うと、賢は意識を集中し、由仁の家の居間に移動させた。瞬間的に宴席から賢の姿が消えた。賢の座っていた座布団がボイド（空白）を示している。誰もが、不思議な感覚を覚えた。賢の居なくなった空間が何となくはっきり認識しにくく感じる。皆、ぼかんとして言葉を失った。安芸津は腰を抜かしたように驚いて身体を後方に引いた。賢は由仁の家の居間に姿を顕した。部屋は真っ暗だった。賢が姿を顕すと直ぐに、キッチンの所に妻の亡霊が現れた。

「お帰りが～遅いので～、心配して～いましたわ～」

「まだ、帰ってきたわけではありません。もう一度戻ります。もっと遅くなってから帰宅しますから」

「そう～ですか～、主人が～留守です～から～、こ～こ～ろ～細いのです～。早く～帰って～きて～ください～ね～」

か細い声でそう言うと、幽霊は姿を消した。賢は明かりを点け、何か証拠になるものはと辺りを見廻した。そして、壁からA3版ほどの山の写

真の入った額を外すと、明かりを消して意識を宴会場に戻した。肉体を宴会席の自分の座布団の上に顕現させるとき、何かが邪魔になった。賢はそれを避けるようにして座布団の端に座ることを意識した。感覚を宴会席に戻し目を開けると、全員が目を剥いて賢の方を見つめている。邪魔になったのは雪坂の足だった。雪坂が賢の座布団の上に両足を投げ出し
ていた」

「あっ、ごめんなさい、雪坂さんの足があるとは思わなかった」

賢は雪坂の両足のすねの上に腰掛けるような形になってしまった。直ぐに腰を上げると、雪坂も足を引いた。雪坂が言った。

「ちょっといたずらしちゃった。ごめんなさい」

賢はにっこり笑って頷くと、手にした額を前に翳して言った。

「居間の壁に掛かっていた山の写真です。あの家の家主は写真が趣味で、よく撮っていたようです。そう言えば、稲城さんも写真がお好きなようですね。どうですか？この写真は？」

稲城が言った。

「内観部長、驚きました。まだ身体が震えています。僕なんか初心者ですから、他人の撮った写真の評価などおこがましくてとても……」

安芸津が言った。

「おまえ、どこでそんな手品を習ったんだ。仕事もろくにしないで、そんなことばかりやっていたんだろう。だからとばされたんじゃないか？」

「これは誰でもできるんですよ。テレポテーションです。どなたか僕と一緒にテレポテーションしてみますか？ほんの5分ほど」

雪坂が右手を挙げた。

「はい」

他の者は皆、黙っていた。賢が消え、再び顕れたのを目の当たりにして、驚愕した状態からまだ覚めていないようだった。賢は立ち上がった。雪坂も立った。賢は雪坂の手を握った。

「雪坂さん、いいですか、絶対手を放さないでくださいね。ふざけて離したら、この世に戻って来れませんからね。では目を瞑ってください」

雪坂は不安げに賢の目を見つめ、そして両目を閉じた。

「大丈夫です。僕の手をしっかりと握っててください。では、すすき野の街に出掛けましょう」

賢はもう一度雪坂の手をしっかりと握ると、雪坂もきつく握り返した。賢は先ほど奥日に連れられて歩いて来た、すすき野の大通りの上空に意識を移した。宴会場からふたりの姿が消えた。賢は雪坂の手を引いて、すすき野の上空に滞空した。すすき野の夜景はきらびやかで眩しかった。賢が言った。

「雪坂さん、さあゆっくり目を開けて、驚いてばたばたしないでくださいね。下に降りたいと思っただけです。あくまで僕と一緒に居ることを意識してくださいね」

雪坂は頷いた。生まれて初めてみる道路の上空からのすすき野の街が、雪坂の目に美しく映った。

「部長、美しいです。でも怖い」

「恐怖心を起こしちゃ駄目ですよ。風になったつもりで、何も考えずに浮かんでいてください」

「はい」

そう言いながらも、雪坂の意識は地上に移って行った。次第にからだが重くなってきた。賢は必死に上空に意識を持ち上げたが、雪坂がしがみ付いてきて、どうにもならなくなった。賢は必死に浮揚を意識し、かろうじて歩道の上に着地した。雪坂はまだ賢にしがみついている。

「雪坂さん、さあ離れて。これじゃあ、ちょっと空中に浮揚するのは無理だな。仕方ないから、歩いて戻ろうか・・・」

幸い、地上に降りたとき、誰もふたりに気付かなかった。そこから宴会場までは200メートルほどだった。賢は自分たちが裸足であることを思い出した。直ぐに雪坂をビルの影に連れて行った。

「雪坂さん、何も考えないで、さっきと同じように僕の手を握って、目を閉じて、何も考えちゃ駄目だよ。いいね。今度は戻るだけだから」
そう言うと、賢は意識を宴会場に移した。意識を安定させるのに時間が掛かったが、漸く自分と雪坂の身体を宴会場の元の位置に出現させるこ

とができた。

「さあ、目を開けて、もう大丈夫。ちょっと足の裏が汚れてしまったね」
雪坂も目を開けた。全員呆然としていたが、雪坂が目を開いて、両手を掲げて振った。全員拍手をした。保木が言った。

「雪坂さん、どうだった？本当なの？本当にすすき野の通に移動したの？」

雪坂は言った。

「そうです。酔いが覚めちゃいました。私、内観部長と一緒に空中に浮いていたんです。でも私がどうしても地上のことを意識してしまったので、歩道に落ちてしまいました。ほら見てください。足の裏が汚れているでしょ。少し裸足で歩いたのよ」

保木は後ろを向いて膝を折り曲げた雪坂の左足の裏を覗き込むように見た。確かに肌色のストッキングの足の裏の部分が黒ずんでいた。保木は興味深そうに言った。

「ねえ、ねえ、本当に空に浮いていたの？」

「本当よ。ネオンがとても綺麗だった。上から見える景色は、下から見るのとちょっと違うわ。ビルの中や、屋上から見るのとも違うのよ。何か不思議な感覚。「自分が生きてる」って感じなの。どうしてかしら」

「凄いわね」

賢をそっち除^のけで2人は話に夢中になっている。安芸津は考え込んだようになって、何も言わなかった。江梨と亀田、三田村と田野村は小声で何か話している。奥日はまだ興奮から冷めないようだった。

「内観部長、マジックなんですか？マジックなら、内観部長は天才マジシャンです。今まで見たどんなマジックより凄いです。どんなトリックがあるにしても、初めて来た宴会場でこんなマジックができるなんて。わたし、引川天功のファンなのです。でも劇場や、広い特設会場でやっている訳じゃないし、とっても驚きました」

賢は言った。

「奥日さん、君だってできるんだよ。何時の日か分からないけどね」

「わたしもマジックができるようになるんですね。どうすればいいんで

すか？」

「心を愛と、慈悲で満たして、意識を極限まで純粹にして、常に自分の意識の中心に向けていて、しかも目覚めて生きていれば、自然に自分が無くなって、本当の自分が顕れてきて、そうすると、この世界の呪縛は無くなるんだ。今は分からないかも知れないけど、その内徐々に分かってくるよ。僕も君たちの近くに居るから、機会があれば少しずつ教えてあげるよ」

「部長、楽しみです。是非教えてください」

「うん、いいよ。時代が変わるんだからね・・・」

黙って見ていた安芸津が口を開いた。

「内観はペテン師かマジシャンだって噂は本当だったんだ。目の当たりにすると、これはペテンというより、上手いマジックだな。だけど、仕事の時は変なマジックを使うなよ」

「分かっています。今日は何かやれということなので、仕方なくやりました。本当はとても疲れるし、意識が歪むのであまりやりたくないんですけど、今日は僕を知って貰いたいと思いましたので・・・時代が変わりつつあるのです。だから、こういうことも、みんなに見せる必要があるんです」

「おまえの言うことはよく分からん。まあ、面白いショーだった」

それからは皆、酒が回ってきて、日常のことに話題が移り宴席は雑然としてきた。最期に田野村の一本締めでお開きになった。安芸津は2次会に行こうと言った。しかし、賢は転居したばかりで、やらなければならないことがあるとの理由で、紅葉傘の前で全員と別れた。賢は奥日に聞いて、駅前通を北に向かって歩いて行った。5、6分歩くと、後ろから誰かが小走りで追ってきた。雪坂と三田村だった。三田村が言った。

「内観部長、由仁までお帰りだと岩見沢で乗り換えないといけないですね。最終に間に合えばいいんですけどね」

それを聞いて、雪坂が言った。

「今8時半だから、大丈夫ですよ。9時56分が岩見沢の最終ですから。それに間に合うように9時3分発に乗れば大丈夫です。わたしも同じ方

向だからご一緒しましょう。部長は札幌の時計台はご覧になったことがありますか？」

「いいえ」

「ちょっと寄って見てゆきましょう。通り掛かりだから、案内します」三田村が「お先に」と言って駅に向かって急ぎ足で去って行った。時計台は、有名な割に大きな特徴もなかった。雪坂が言った。

「札幌に来たのだから、先ず初めに見ておいた方がいいです」時計台を見ると、ふたりはそのまま駅の方角に向けて歩いた。それほど時間があるわけではなかった。急いで歩いて札幌駅構内に着いたのは8時55分だった。賢が由仁までの切符を買うのを待って、雪坂は改札口に急いだ。賢も持ちにくい額と鞆を抱えて、小走りで後を追った。電車に乗った時は9時を回っていた。電車は帰りのサラリーマンで混雑していた。賢が荷物をつり棚に載せると、両手でつり革にぶら下がるようにしながら雪坂が言った。

「驚きました。あれはマジックじゃないですね。でもどうして目を瞑ったのですか？」

「うん、説明しても分からないと思うけど、僕たちふたりが存在している場の次元を変えたんだ。そのとき意識が混乱を起こさないために、君には目を瞑っていて貰ったんだよ。僕は瞑ってなかったんだよ」

「部長、私、どこまで行くと思いますか？」

「僕と同じ方向だと言うし、乗り継ぎの時間も知っていたし、室蘭本線の沿線なんだろう？」

「部長と同じ由仁なんですよ」

「えっ？本当か？」

「本当です」

「いろいろ部長とお話ししたいことが沢山あります。さっきの私の唄、聞いてくださったでしょう。どう思いました？」

「プロジェクトXのテーマソングだね。誰にも見向けられずに、努力している地球上の星に出合いたいという唄だね。誰でも、心の内に「人の為に役に立つ」という高邁な目標があって、その目標の達成のために努力

している人は、僕には宇宙の星のように見えるけどね」

「私は、もっと大きな星を探しています。もう、ほとんど駄目かと思うほど荒廃してしまった、この社会の人々の心を救ってくれるような人、そんな人に出会いたいのです。そういう人を探しています。あの唄はそんな風に私には聞こえます」

「君も理想主義者なんだね。僕は今のままの全ての人を受け入れようとしているよ。そのまま、十分だと思っている。それに、僕は人の気持ちを変えることなんてできないと思っているんだ。本当はMIプロジェクトはお膳立てに過ぎないと思っている」

「お膳立てって、何ですか？」

「プロジェクトは人々に気付きを与えるだけの役目しか担えないということだよ。心の改革は自分自身でやる必要があるということ」
ふたりは岩見沢駅で、室蘭本線に乗り換えた。終電だった。

「内観部長、恋人ってどんな方ですか？」

「とてもすばらしい人だよ。1人は君と同じように美人で、女神様のように愛に満ちているし、実業家のように活動的な人で、もう1人はとても上品で、礼儀正しくて、人々の魂を救うために命を捧げようとしている人だよ」

「えっ？恋人って、2人もいるんですか？それに、そんなスーパーウーマンのような人がこの世界にいるのですか？部長の理想の女性ということですか？あこがれの人とか」

「そう、2人はあこがれの人たちだな。彼女たちには、もう会えるかどうか分からない」

「なんだ、やっぱり理想の女性なんだ。恋人なんて言うから、いつも近くに居るのかと思った」

「ふたりとも日本には居ないよ。それともう一人、女房役の女性が居るよ。その人は国内に居るけど」

「女房役の方もいらっしゃるのですね。それはどんな方ですか？」

「一緒にプロジェクトを推進している人だよ。僕がリーダーだったとき、副リーダーとして、女房役を引き受けてくれて、いつも身の回りの世話

から、仕事の段取りまでこなしてくれた人だ」

「それじゃ、会社の同僚だった方ですね」

「そうだよ」

「日本にはそのほかに、お友達は居ないのですか？」

「一杯居るよ。僕は知り合うと、ほとんどの人を好きになってしまうからね。僕の方からはどの人も友達に見えるんだ。本当だよ」

「それじゃあ、私のことも友達として扱ってくださいますか？」

「もちろんだよ。それに会社の同僚だし、よろしく頼むよ」

「こちらこそよろしくお願いします」

「君の趣味とか、家族構成とか聞かなかったね。言いたくなければいいんだけど」

「ええ、言いたくないです。私、孤児なんです。父も母も私が小学3年生の時に立て続けに亡くなりました。私一人残して・・・私、親戚の家で育てられました。今は一人で生きています。江別にアパートを借りて一人で住んでいます」

「えっ？君は由仁じゃないの？」

「いいえ、今日は由仁に來ただけです」

「もう帰りの電車無いだろう。由仁に親戚でもあるの？」

「いいえ、友達の家があります。今夜はそこに泊めて貰います」

「こんなに遅く伺っても大丈夫なの？」

「そのひと、優しいから大丈夫です。それに、私その人のことをとっても尊敬していますから」

「そうか、それならいいが。兎に角、その家まで送って行くよ」

「はい、ありがとうございます」

賢は祐子と同じような運命を辿っている雪坂との出会いを、意味深く感じた。ふたりは心地よい眠気を覚え、時々うとうとした。漸く由仁の駅に着いた時は、もう10時半を回っていた。雪坂の乗り越し精算を待って賢は改札を出た。駅前にはタクシーが2台停まっていた。中年の女性が最初のタクシーに乗り、ふたりは2台目のタクシーに乗り込んだ。

「雪坂さん、君の友達の家は何処？」

「はい、由仁町123-45番地です。運転手さん、お願いします」

「はい、分かりました。でも、お客さん、あそこは空き家ではないのですか？」

「いいえ、友達が昨日から住み始めました」

「分かりました」

賢は、雪坂が自分の家の番地を告げるのを聞いて、彼女が最初から自分の家に来るつもりだったことを知った。しかし運転手に覺られないように、敢えて何も言わなかった。

「今日は、よろしくお願いします」

「・・・そうか、そういうことだったのか」

「そうです。お友達の家に泊めてもらうのよ。いいでしょう？」

「だけど、覚悟が居るよ。あそこは幽霊が出るんだよ」

「そんなこと言って脅かしても駄目です。いざとなったら一緒にテレポーターションしてもらいます」

賢は黙ってしまった。

由仁

借家に着くと、雪坂が言った。

「運転手さん、明日6時に予約できますか？こちらに来て頂けますか？」

運転手は了解した。賢は料金を支払ってから雪坂を促して降りた。運転手は特に不審に感じている様子もなくそのまま帰って行った。

「だけど、雪坂さん、本当にどういうつもりなんだ？」

「私、さっき、部長の所に泊めて頂くことに決めたんです。いけませんか？」

「なぜ？」

「分からないけど、どうしてもそうしたいんです」

「どうなったって、僕は責任持てないよ。それにさっきも言ったけど、幽霊も出るし」

「冗談なんでしょう？幽霊なんて、私を脅かして帰そうとしているんでしょう」

「本当だよ。昨日も幽霊と話をしたんだ。今日も僕を待っているって」雪坂は怯えるように賢の腕にしがみついた。本当に怖くなったようだった。賢は書類鞆と写真の額を持っていたので、雪坂が腕にしがみつくと、バランスを保つのが難しかった。雪坂をつり下げるようにして玄関の扉の鍵を開けた。内扉は鍵が掛かっている。部屋は真っ暗だった。奥のキッチンの入り口辺りに青白い影が見える。奥の方でカタコトと音がした。雪坂は顔を賢の背中に押しつけてしがみついた。

「お客さん～、お帰りな～さい～～」

蚊の鳴くような声をした。賢は部屋の中に入ろうとした。

「もう、いやー」

雪坂は半分泣き声で言った。あまりの恐怖に、その場で失禁してしまった。賢はそれに気付かず、ソファの所まで進んだ。雪坂は顔を賢に押しつけてしがみつки、引き摺られるようにして附いて来た。賢がソファに座ると雪坂も賢の胸に頭を埋めるようにして座った。雪坂は啜り泣いている。賢が幽霊に向かって言った。

「奥さん、貴女はご自分が病気で苦しまれていたことを、お忘れですか？」

幽霊は少し間を置いてから、やっと聞こえるような声で応えた。

「そんな～こと～～、私～、知り～ません～～。ず～うっと、ず～うっと・・・元気～ですので～」

「あなたは、癌を患っていたのですよ。そして、それが原因で死んでしまったのです」

「わ～た～し～は～、この通～り～元気です～。こ～の～家も～、私～の～お部屋も～、何も～変わって・・・い～ま～せん～から～、私は～、病気～なんか～に～な～ら～な～かった～ので・・・す～」

「奥さん、いいですか、試しに、ご自分の指で、ご自分の胸を突いてみてください」

幽霊は、言われたようにした。そして、自分の指が身体の中に吸い込ま

れるように入ってしまうのを見て、仰天したようだった。

「あ、あ～、どう～しましょう。私の指が～身体に～突き刺さって～・
・・」

「奥さん、貴女はもう亡くなっていて、昔の身体は無いのですよ。分かりますか？貴女には、亡くなった後に行かなければならない本来の場所があるのです。ご自分が亡くなったことを理解できましたか？もしできたのなら、戻るべき場所に戻ってください。こんな所に何時までも居るのは、貴女にとって良くありません。自分が亡くなったのを自覚できれば、直ぐにお迎えが来ます」

「私は～、死んで～いるのですか？どおりで～おかしな～こ～と～ばかり～あると～思い～ました～」

いつの間にか、幽霊の横に背広を着た男性が現れていた。その男性が幽霊に言った。

「私と一緒にいらしてください。昔のお知り合いが沢山お待ちですよ。貴女がご存命のときの思い出話などなさってください。さあ、あちらに参りましょう」

幽霊はその男性の後に附いて、キッチンの壁に向かって突き進み、そして、そのまま壁の中に消えてしまった。賢は、身体を押しつけてくる雪坂を引っ張るようにして、壁スイッチの所に行き部屋の照明を点けた。雪坂はまだ賢にしがみついて目を瞑っていた。身体が冷えていて、小刻みに震えている。

「雪坂さん、幽霊は消えましたよ。もう出ないと思います。大丈夫ですから、さあ目を開けて」

雪坂はおそるおそる目を開けた。そこは広い居間だった。

「内観部長、私怖くて、恐ろしくて・・・・私・・・あの一、雑巾がありませんか？」

賢は雪坂の失禁を知った。

「雑巾は、確か、台所にあったと思ったな。取ってこようか？」

「いいえ、私が自分で・・・でも、怖いから、一緒に来てください」
賢が先に歩くと、雪坂は賢の背中に身体を押しつけるようにして附いて

行った。そして、賢は台所のシンクの下の扉を開けて、雑巾を取り出し、雪坂に渡した。雪坂はそれを手にしたまま、その場を動かない。

「どうしたの？附いて行こうか？」

「いやです・・・でも・・・怖いから、途中まで附いて来て、部長はソファに座って、キッチンの方を見ていてください」

賢は途中まで一緒に行くと、ソファの袖に座り、先ほど幽霊が立っていた辺りに視線を固定して、雪坂が始末を終えるのを待った。雪坂は粗相の汚れを拭ったものの、それをどうしたらいいか困っていた。賢が言った。

「雪坂さん、洗面用のシンクはそっちの扉を開けて、一旦廊下に出て突き当たりの引き戸の向こうだよ。トイレは洗面所の左側の扉がそうだよ。廊下に出るときはそこのスイッチをONして・・・」

「部長、シンクの所まで一緒に附いて行ってください。わたし、怖くて一人じゃ行けません」

「もう、大丈夫だよ。幽霊にはお帰り頂いたから、心配要らないよ」

そう言いながらも、賢は雪坂の後に附いて廊下に出た。洗面所に向かって歩いてゆくと、今開けてきた扉が、「バタン」と音を立てて、ひとりでに閉まった。雪坂は雑巾を放り出して賢に齧り付いた。

「いやー！」

そう叫ぶと、しくしくと泣き出した。

賢は自分の胸に雪坂の頭を抱きしめて言った。

「この家には、ポルターガイスト現象も起きていたようだけど、幽霊とは直接関係していなかったようだな。後で次元を超えてエネルギーの流れをしてみるよ。兎に角君は先ず入浴してしまいなさい。飲み会だったし、外を歩いて足も汚れてしまったから、汚れを落とした方がいいだろう。僕が浴室の外で見張っていてあげるから。心配しないでゆっくり入浴するといいよ。ポルターガイストは心配しなくても大丈夫だよ。寝室では起きないらしいから」

雪坂は漸く泣きやんだ。そして洗面所に入りシンクで雑巾を濯いだ。賢は浴室に入って湯船に湯を張る為に湯栓を開けた。深夜電力で湯が沸い

ているとは謂え、暫くの間は水が出てきた。水は身体の僅かなぬくもりも奪ってしまうほど冷たかった。水が湯に変わったところでバスタブの栓を閉め、浴室を出て洗面所を抜け廊下に出ようとした。

「部長、私、着替えを持っていないので・・・」

「分かった。男物で良ければ、新品の下着があるよ。それと、今夜は僕のパジャマを使えばいい。今持ってきてあげるから待っていて」

そう言う賢は急いで寝室に戻ろうとした、しかし雪坂は賢から離れたくないようで、一緒に附いてきた。賢は寝室に入ると引き出しから、下着とパジャマを出して雪坂に渡した。洗面所に戻ると、浴室の湯船が一杯になっていた。湯栓を閉め、雪坂を洗面所に残して、賢は洗面所の外に出た。雪坂が入浴を済ますまでそこで待つことにした。賢はこの家全体のエネルギーの状態を透視してみた。呼吸を整え、意識を眉間に集中して瞑目した。明らかにエネルギー場の歪みがあるようだ。キッチンから廊下、そして妻の寝室、それに浴室に特に大きなエネルギーの渦があるのが分かる。そのエネルギーの流れは下の方から来ているらしい。地中に意識を向けてみると、地下深くに大きな空洞があるのが分かった。その空洞の周囲に2種類の岩石層があり、それが押し合って歪みが発生しているようだ。賢は岩石に意識を働かせて、歪みの解消を図ろうと考えたが、そのとき浴室から悲鳴が聞こえた。

「きゃー、助けてー！」

賢は急いで、洗面所に入り、浴室の扉を開いた。雪坂がバスタブの縁にしがみついて震えている。

「助けて」

髪がびしょり濡れている。美しい顔も、怯えて青ざめていた。

「どうしたんだ」

「窓が急に、がたがた揺れて、外に赤い光が揺れて見えて、石けん箱が棚から落ちたの。わたし怖い！」

「心配要らないよ。僕がそこにいてあげるから心配しないで入って。大丈夫だから」

そのとき、また窓ががたがたと音を立てて揺れた。雪坂は目を瞑り両手

で耳を塞いで震えている。賢が言った。

「大丈夫だよ。磁場のエネルギーが乱れているんだ。君が入浴している間に僕がエネルギーの歪みを正して来るから、さあ落ち着いてゆっくり風呂に入って」

賢は洗面所に戻り浴室のドアを閉めると、直ぐに先ほどの地中の空洞に意識を向けた。岩と岩がせめぎ合っていて、時々火花のような激しいエネルギーの流れを発生させている。賢は岩に意識を集中した。岩の意識が伝わってくる。そこは人間達が削岩機を使って、砕き、削り、土を掘り、燃料を採掘するために空洞を造った跡だった。化石燃料が見付からなかったため、この洞を放置したという過去があることが読み取れた。岩の中に刻まれた過去を読み取るのは、賢にとって初めての経験だった。賢はぶつかり合っている片方の岩に意識を向けた。削り取られた部分の比重が軽くなって、安定していた位置エネルギーの方向が変わったのだ。更に賢はぶつかり合っているもう片側の岩に意識を向けた。その岩は空間が出来て、空洞の方向に落ちる力が働いていた。しかし、ぶつかり合っているもう片側の岩がそれを食い止める方向に作用していて、その二つの間にエネルギーの歪みが発生していた。それは二つの岩のぶつかり合う意識だった。賢はエネルギーの調和を図り、ベクトルの方向を変えるようにその二つの岩の意識に働き掛けた。岩に影響を与え、歪みをもたらしたのは、人間達の残した、欲望と闘争の意識のようだった。残っている意識の破片を取り除き清めた。エネルギー場は次第にバランスを取り戻していった。賢は意識を洗面所に戻した。洗面所の箆の中に、雪坂の脱いだ衣類があり、その横に賢の下着とパジャマが置かれている。タオル掛けに洗ったばかりの下着が干してあった。賢は雪坂に向かって言った。

「もう、大丈夫だよ。エネルギーの歪みが弱くなったから、ポルターガイストのような現象は起きないよ。岩が人々の捨れた意識の影響を受けて、大きな歪みを生み出していたんだ。影響している意識の破片を取り除いて、岩に調和の意識を作用させたから、もう大丈夫だ」

中から、雪坂の声がした。

「部長、よく聞こえません」

「もう、大丈夫だと言ったんだよ。理由は後で話すよ。もう洗面所の外に出ても大丈夫だね？」

賢は少し大きな声で話し掛けた。

「はい・・・大丈夫・・・だと思います」

雪坂の返事を聞いて、賢は再び廊下に出て引き戸を閉めた。10分ほどして引き戸が開き、賢のパジャマを身につけた雪坂が、衣服とバスタオルを手にして現れた。

「部長、ありがとうございます。部長に勇気づけられたら、何も怖くなくなりました。とっても気持ちよくお風呂に入れました。部長、服が濡れてしまいましたね。済みませんでした」

賢はそう言われて、自分の服が濡れていることに初めて気付いた。賢は雪坂を連れて寝室に行った。

「雪坂さん、ここで待っていてください。僕も風呂に入って来ます」

賢がタオルや着替えを持って出て行くと、雪坂も後を附いて来た。

「わたし、やっぱり一人では居られません。先ほどの更衣室で待っています」

雪坂が更衣室と呼んだ洗面所には籐のスツールが置いてあった。賢が脱衣する時、雪坂はスツールに座り、後ろを向いて目を瞑っていた。賢が浴室に消えると、雪坂はスツールを入り口のドアの所に持って行って、座った。中からシャワーの水の音がする。賢が湯船に入るのが分かる。その音を聞いているだけで、雪坂は安心だった。賢が湯船の中から話し掛けた。

「雪坂さん、もう一度聞くけど、どうしてここまで附いて来たんだ？」

「わたし一人なんです。ミス北海道になったら益々ひとりぼっちになってしまいました」

「よく聞こえないよ」

雪坂は扉を半開きにして話した。

「これなら聞こえるでしょう？わたし、ひとりぼっちなんです。ミスに当選したら、誰も近づかなくなってしまっ・・・だから、初めて逢

った人には自分から、積極的に近づくのです。でも誰も本当の友達になってくれませんでした。部長、私のことを友達だと言ってくれましたね。わたし、とっても嬉しかった」

賢が、湯船の栓を抜いて出て来ると、雪坂は賢の裸を目の当たりにして、顔を紅潮させ、急いで、スツールを持って奥に移動した。賢はそんなことは気に掛けず、シンクの所に行きタオルで身体を拭い、パジャマを身に着けた。

「おまちどおさま。さあ、もう寝ないとね。車がないから、明日は早く起きなければ」

ふたりは、賢の寝室に入って行った。

「君はここで寝るといいよ。僕はここの家主の奥さん・・・さっきの幽霊の寝室で寝るから」

「部長、そんなこと言わないでください。一緒に寝てください」

雪坂は下を向いてそう言うと、そのまま俯いていた。

「わかった」

賢が目覚まし時計をセットすると、ふたりはキングサイズベッドに潜り込んだ。賢は静かに瞑想に入り、この日の省察を行った。30分ほどして窓のがたがたという音に賢は瞑想を解いた。外は風が出てきたようだった。雪坂が賢の側に寄ってきて賢の肩に身を埋めた。雪坂の胸のふくらみが、賢の腕に感じられた。雪坂は素肌にパジャマを着ているようだった。賢は意識を眉間に持ってゆき感覚を遠ざけた。

翌朝、ふたりは目覚まし時計の音で目を覚ました。雪坂は賢の腕の中にいた。賢は雪坂を揺すって起こすと、額に口づけした。雪坂は眠そうな目をこすりながら起きあがった。まだ陽が昇っていなかった。

出社したのは始業時間10分前だった。稲城が安芸津の席のサイドデスクに居て、ふたりで何か話し合っていた。稲城が頭を下げてから席を立つと、安芸津が言った。

「内観部長、お早いお出ましで。ご機嫌はいかがですか？」

「おはようございます。昨日は、皆さん、ありがとうございます」

賢は全員に向かって大きな声で言った。席に着いている者は賢の方を見

て軽く頷いた。賢が席に着いてから5分ほどして、雪坂が更衣室から出て来て席に着いた。賢はトーンを落として言った。

「雪坂さん、昨日はありがとうございました」

雪坂はちらっと賢を見て視線を落とし、小さな声で、

「こちらこそ、ありがとうございました」

と言った。

この日の午前中、賢はメールの確認を行ってから、昨日の続きのバーチャルシステム館の建設計画説明書の作成を続けた。資料を作成している間、時々雪坂の方を見ると、必ず視線が合った。雪坂はその度に、直ぐに視線を外らした。昼食前に亀田が賢の席にやって来た。

「内観部長、昨日はすばらしいものを見せて頂き、ありがとうございました。昨日も言いましたように、僕はバーチャルシステム館に附いて、詳しく勉強したいのですが、何かいい資料はないでしょうか？」

「亀田さん、資料はいろいろあるんですが、どれも秘匿性の高い資料ばかりなんです。今、僕が作成中の資料は支社内で使用するプロモーションに用いる資料ですから、説明会が終わって支社内に公開してから見せてあげます」

亀田は喜んで席に戻った。昼食の時間になると、雪坂が言った。

「内観部長、今日はどうされますか？」

「雪坂さん、この辺りにコンビニは無いかな？」

「コンビニなら、ビルを出てレストラン街に向かってゆく途中にあります」

「僕は、今日はそこで弁当を買うことにするよ」

「部長、私もお弁当にします。公園で、一緒に食べませんか？」

ふたりは昨日のように全員が出払ってから外に出た。コンビニは混雑していた。弁当を買って帰るサラリーマンや、オフィスレディーが沢山居た。ふたりは弁当とお茶を買って雑踏を逃れるように通りから脇道に入った。5分ほど歩くと公園に着いた。公園の中にはベンチがある。

「ここは中島公園です。会社の人はあまり来ないわ。少し奥に入りましょう」

公園の中央に池があり、池の畔に沢山のベンチがある。どれも池の方を向けて置いてある。まだ12時前なのであまり人は多くない。雪坂は池の畔のベンチを指さして、そこに座ろうと言った。ベンチに腰掛けると、ふたりは早速袋から弁当とお茶を取り出した。ふたりが弁当の包装を破り、食べ始めようとしたとき後方から女性の声がした。

「内観部長、私たちも一緒させて頂いていいですか？」

奥日と江梨だった。ふたりとも布の袋を下げている。賢は笑顔で言った。

「どうぞ、どうぞ」

ふたりは賢の右隣のベンチに腰掛け、布の袋を開きそこから弁当箱を取り出した。小さなミニアチュア・ポットの茶も持って来ていた。

「私、さっき、部長と先輩が公園でお弁当を食べると言っているのを聞いて後に附いて行って、一緒に食べようと江梨に言ったんです」

賢に近い位置に腰掛けた奥日と言った。

「昨日のこと、お聞きしたかったんです。私、昨日は興奮して、寝付かれませんでした。本当にびっくりして……」

江梨が顔を覗かせて言った。

「君たち、あれから2次会に行ったの？」

「はい。三田村さんと先輩以外の人はいつも、安芸津部長に附いて2次会に行くことになっています。だって、行かないと後が怖いからです。昨日は課長だけは会社に戻りましたが、他の人は全員、部長に附いて近くのカラオケパブに行きました。でも私たちふたりは1時間ほどで帰りました。部長と主任と亀田さんと保木さんの4人は、それからまたどこかに行ったようです」

奥日が応えた。

「札幌も夜は華やいだ街に変わるんだな」

「本当に人が多いですね。会社が多いですから。でも、最近少し減ってきたように感じます。そうは言っても、週日はどこの店に行っても、会社帰りの人たちで一杯です。連休の間は観光客に替わるようすけど」
奥日がそう言うと、やっと許しが出たとでもいうように4人は一斉に弁当を開けて食べ始めた。少しして、江梨が言った。

「部長、昨日のこと、お聞きしてもいいですか？」

「いいよ」

「あれ、どうやったんですか？部長は、誰でもできるようになるっておっしゃったでしょう？私でもできるのかしら？」

「うん、人間なら誰にでもできるはずなんだけど、今のままの意識では、一寸難しいだろうね。かなり修練しないとね」

「それって、なんか怖そうですね。あのムーア真理教を連想しちゃいます」

「特殊な功法を修練しろって言っているんじゃないよ。普通の意識の状態じゃ無理だって言っているだけだよ。だけど、それほど遠くない将来、昨日の様なことは誰でも皆できるようになると思うんだ。どうやってやるか分からなくてもね。君は、自分の心臓がどうして、休みなく働いているか分からないだろう。夜寝ても、朝になるとなぜ目が覚めるか分からないだろう。いろいろなものが見えるだろう、そしてそれを手で触れたりできるだろう。これって、ものすごく難しいことなんだよ。どこかの会社がロボットを作っているだろう、だけど人間の感覚を実現することは殆ど不可能だ。あと、何百年、何千年かかるか分からないんだよ。それほど難しい機能が、人間の身体と意識には組み込まれているんだ。でも誰も何とも感じないでそういう機能を使いこなしているだろう。それと同じように、ある時期から、生まれたときからテレポーションや、透視ができるような人間が顕れてくる。そういう人たちは自然に、超能力と呼ばれる機能が使える状態になっていると思うんだ。これまで、この社会で生きてきた人にはそう簡単にはできない。それは人間が作り出した形やルールが人間を固定的なものにしてしまっているからね。どうしても昨日の様な経験をしたければ、誰か、それができる人の側に居ればいいんだ。そういう人は、周囲の場も同時に変化させるからね。分かるかな？」

江梨は箸を休め、目を輝かせて訊いた。

「部長の側に居れば、それができるようになるんですか？昨日の先輩みたいに」

それを聞いて、今まで黙っていた雪坂が言った。

「わたしは、そんなつもりで部長の横に座ったんじゃないわよ。偶然あの席になったんだから」

「でも、先輩は昨日のお昼も、部長と一緒に食事に行ったでしょう？」

「あなた、行きたかったら、部長を誘えばよかったのよ。わたしは、内観部長と一緒に食事をしたかったのよ。だからそうしたの」

「昨日は、どうしていいか分からなくて、雪坂さんが連れて行ってくれたおかげで、空いている店で食べられたんだ。感謝しているよ。奥日さん、貴女のこととても感謝しているよ。昨日は各部署に挨拶回りに連れて行ってくだらう。どうしようかと思っていたので助かったよ。江梨さんも昨日は、僕の歓迎会を仕切ってくれて、とても感謝しているよ。みんな親切なんで、僕も安心して支店に勤務できるよ」

雪坂が言った。

「部長、そんな八方美人みたいに、ご機嫌取りのようなこと言わないでください。会社の業務としてやっているんですから」

「先輩、それは酷いです。私は精一杯部長の為になろうと思ってやっています」

奥日が涙ぐんで言った。

「君たちはすばらしいよ。意識して生きているじゃないか。殆どの人が、無意識で生きているんだ。だけど、君たちは意識的に生きている。この世界に生まれてきた限り、それが一番大切なことなんだ。それが、生きるということなんだ。新しい発見に感動して、思い切り喜びを感じる。それが生きる醍醐味というものだからね」

3人ははぐらかされたような気がして黙ってしまい、また残りの弁当を食べはじめた。

賢は午後、奥日にPCからの印刷方法を聞き、PCのセットアップをして建設が予定されている丸山公園近辺の地図を印刷し、それを鞆に入れて外出した。場所を視察するためだ。それは丸山動物園の近くの宮ノ森という小高い丘のある場所だった。現在、地主と土地購入のための交渉を行っていると聞いていた。賢はタクシーの運転手に頼み、その近くを

廻って貰った。その近隣には動物園の他、球場や競技場、熱帯植物園などがある。休日には札幌市内ばかりでなく、周辺の地域からも沢山の家族連れなどが訪れると聞いていた。賢はバーチャルシステム館を建設するには最適な場所だと思った。地価が下落したとは謂え、札幌市内に広い土地を確保することは、そう容易いことではないようだった。昨日支社長が「本社の企画部門が支社の総務部門と共同で土地買収の活動をしている」と言っていた。建物の設計は順調に進んでいるようだったが、土地の形態が未確定だったため、入館者のためのエントランスの作り方と、駐車場からのアプローチの仕方をどうするかがまだ決まっていなかった。近隣の住民に渋滞などの迷惑がかからないように、道路の整備も必要だと思われた。設計から施工までは、外部団体に委託する形になっていて、その業務に入札した企業の内、現在は3社が基準をクリアして残っていた。しかしどの年齢層をメインのターゲットに絞るかについて、まだはっきりした方針が決まっていなかった。賢はそれらの内容をまとめて進言しようと考えた。動物園の前で一旦タクシーを降りて、少し歩いてみることにした。週日とあって、あまり人影を見掛けない。できるだけ週日の混雑の無い時に集客するのが理想的だと考えた。先ず定年退職者と幼児、それに主婦にターゲットを絞るのがいいと考えた。次第に具体的なイメージが展開されてきた。賢は一旦オフィスに戻ることにした。オフィスに着いたのは5時少し前だった。賢が席に着くと、安芸津が大きな声で言った。

「どこに遊びに行っていた？自分の仕事をしっかりやれ！」

それは、感情の爆発のように賢の耳に響いた。

「バーチャルシステム館の建設予定地を調べて来ました」

賢が言ったが、安芸津は知らん顔している。雪坂が小さい声で言った

「先ほど、バーチャルシステム館の件で、内観部長に電話があったんです。誰も応えられなくて、安芸津部長が出たんですが、回答できなかったようなんです」

「そうですか」

賢は、プロジェクトのことを理解しているのは自分だけなので、自分が不在にすると、他の者が対応できないことを知ることになった。宮ノ森の調査結果をまとめそれを説明資料に加えると終業時間になった。賢はPCをオフし、オフィスを出た。エレベータを待っていると雪坂が小走りで駆けて来た。

「部長、車ですね。乗せて行ってくださいませませんか？」

「かまわないよ」

降りて来たエレベータは一杯だったがふたりは無理矢理乗り込んだ。1階で全員降りてしまい、雪坂とふたりだけになった。

「部長、私、今朝部長の所に忘れ物をしてしまいました。乗せて行ってくださいませませんか？」

「そう、何を忘れたの？」

「それは、恥ずかしくて、言えません」

「わかった」

賢は雪坂を乗せて、道路端にある食堂に立ち寄り、ふたりで夕食を摂った。食堂を出ると、外はもう日が落ちて、周囲が薄暗くなってきていた。賢は家への道をひた走った。家に着くと、もうすっかり暗くなっていた。駐車場から玄関までが、異常に遠くに感じられた。雪坂は賢にすり寄るようにして歩いた。

「雪坂さん、どうしたの？まだ怖いのか？」

「いいえ、本当は忘れたのは品物じゃないんです」

「それじゃ、何を忘れたんだ？」

「私の心です」

「君の心？」

「今日の私は、一日中上の空でした。部長の家のことばかりが頭に浮かんで来て、いくら意識をPCに向けても、考えがまとまりませんでした。それで、「きっと、私は心を部長の家に置き忘れてしまったんだ」と思ったのです。一緒に探してくださいませませんか？」

「君は面白いことを言うね。まあ、とりあえず中に入ろう」

賢は鍵を開けて中に入った。昨日と違い、中の雰囲気は落ち着いている。

照明を点けると、壁の写真がソファーに置きっ放しになっていた。賢はその写真を壁に戻しながら、立っている雪坂に向かって言った。

「コーヒーでも入れようか？」

「部長、私が入れます」

雪坂はキッチンに向かった。昨日の幽霊のことが思い出されて、一瞬立ち止まったが、思い切ってキッチンの奥に入り、棚からインスタントコーヒーを取り出した。カップボードを開けると、ピンク色のコスモスの絵柄が描かれた、オレンジ色の縁取りのあるペアのコーヒーカップが目にとまった。受け皿と一緒に取り出してみると、一つのカップの底近くにアルファベットでKenと書き込みがある。雪坂はもう一つのカップを手にとって見た。そこにはAzusaと書かれていた。雪坂は言った。

「部長、このペアのコーヒーカップ以外に別のカップは無いですか？」

「それでいいよ。まだ新品だから綺麗だよ」

「でも、誰かの名前が書いてありますけど」

「ああ、それは田辺部長のカップだよ」

「田辺部長って誰ですか？」

「本場で僕がプロジェクト・リーダーをしていたときの、サブリーダーだった部長だよ」

「女性ですよ」

「そうだよ。昨日言った、僕の女房役をやってくれた人だ。頭の切れる人だよ。随分世話になった」

雪坂はそのペアのコーヒーカップを使いたくなかった。自分が賢のカップを使えば、賢がAzusaと書かれたカップを使う。賢に自分のカップを使って貰えば、自分がAzusaと書かれたカップを使わなければならない。どちらも我慢ならなかった。雪坂はもう一度カップボードを開けてみた。そこには湯飲みがあった。湯飲みも二つあり、やはり、KenとAzusaという書き込みがある。雪坂は言った。

「部長、私、部長の湯飲みを使わせて頂きます」

「ああいいよ、好きなものを使えばいいよ」

やがて、コーヒーを入れて雪坂がソファーに戻って来た。賢の前にはコ

一ヒューカップを、自分用には湯飲みを持って来た。

「どうした？こたわることないのに」

「わたし、他の女性のものを使うの厭なんです。女は皆そうです・・・
・スプーンもお砂糖も用意しませんでしたけど、必要ですか？」

「いや、要らない」

「部長、田辺部長って、どんな人ですか？」

「うん、頭の切れる人だよ。元は、研究所の筆頭課長だったんだけど、
MIプロジェクトの副リーダーに抜擢されたんだ。そのとき部長になったんだ」

「そういうことじゃなくて、女として魅力的な人かどうかと云うことで
すが・・・」

「とても素敵な人だよ」

雪坂はそれ以上聞かなかった。それから暫くはふたりでコーヒーを飲みながら札幌周辺のことについて話した。賢は北海道という土地の特異性とそこに住む人たちの意識について知りたかった。雪坂は賢の質問にうまく応えてくれた。

「いろいろ教えてくれてありがとう。もう、そろそろ帰った方がいいんじゃないか？駅まで送って行くよ」

「部長、私の心を一緒に探してくれる約束でしょう」

「そんな約束したかな？」

「昨日、部長のベッドに寝たときに落としてしまったみたいなの。あの部屋に行って、探さないと・・・それか、もしかしたらお風呂場かも知れないわ」

「君は、落としてしまったことが分かるんだから、心のことにいつも気が付いていたのかな？」

「ええ、わたしの心は、いつもいろいろなことを考えていたの。素敵な王子さまの様な男性が現れて、わたしにプロポーズするかも知れないとか、今度の休みには函館に行ってみよう、そこで新しい恋が芽生えるかも知れないとか、もしかしたら、わたしは本当は天使の生まれ変わり、その内、急に愛に目覚めて、苦しんでいる人たちを助けるようになると

か、北海道に撮影に来た有名な映画監督にスカウトされて、大女優になってアカデミー賞を取るとか。その一方で、明日はまたあの安芸津部長のいるオフィスに行かなければならないと考えて、たまたま厭になってきたり、このままひとりぼっちで一生を生きるのかも知れないとか、マイナスな考えが浮かんできたり、いろいろなことで頭がいっぱいだったんです。それが、今朝、部長の腕の中で目が覚めたでしょう。そして、それからそう云う考えが何も湧いてこなくなってしまうんです。自分が居て、そして、内観部長が居る。実際にあるものを、あると認識できるだけみたいなんです。必死に何かを考えようとすると、部長のベッドの中で部長の腕の中にいる自分が見えてくるんです。不思議なんです。意外と落ち着いていて嬉しいような気分になります。その居心地の良さときたら、とても素敵なんです。でも、何も考えられなくなってしまったので、仕事も手に付かないんです。わたしの心を見つけなくては、わたしはこれからどうしていいか分かりません」

「なんだ、そういうことだったのか。それは素晴らしいことじゃないか。ほとんどの人は、自分の思考に捕らわれてしまって、自分自身を見失っているんだよ。君がさっき言ったように、やれ素敵な恋人が欲しいとか、やれ次の休みには動物園に行こうだとか、あの人の着ている服は自分の服より素敵だとか、そんなことで頭が一杯で、自分自身に目が向いていないんだ。君は今朝から、自分自身を見つめているじゃないか。それは素晴らしいことだよ。そうなりたくても普通はそうなれないんだよ。君は心じゃなくて思考を落としたんだよ。思考は狂った猿って云われるんだ。それを捨てたんだよ。おめでとう。この家の中を探して、また思考を拾って帰る様な真似はしない方がいいと思うよ」

「そうなんですか？わたしは、これでいいんですね」

「うん、それでいいんだ。仕事の時の思考は、意識の集中で自然に現れてくるよ。だから心配要らない。分かったら駅まで送るよ」

雪坂は説得されてしまった。本当は、もう少し賢と一緒に居たかった。しかし、上手い口実が思い浮かばなかった。賢は雪坂を車で由仁駅まで送った。家に帰り、入浴を済ませてソファで寛いでいると、梓から電

話が掛かってきた。梓は2週間後に北海道支社に赴任できることになったと言った。父親の容態が悪化してきたため、再度総務部長と交渉したら、社長から許可が下りたとのことだった。梓は賢の住所宛に荷物を送るつもりだと言った。

翌日、賢は調査と資料の作成に集中した。昼食は亀田と雪坂に連れられて、レストラン街に出てみることにした。ファミリーレストランに入り、日替わりランチを頼んだ。ハンバーグと鮭のフライ、みそ汁とライスのセットだった。周囲にはどうやら、北海道支社の連中が来ているようだった。背後の席から話し声が聞こえてくる。

「凄かったらしいぞ。本当に消えたんだって」

「支店に居るのか？どこの部署だ？」

「総務らしい。あいつの話じゃ、手品なんかじゃないみたいだと言ってたぞ。消えたときに、家から山の写真を持って帰って来たんだって。だけど、それも怪しいよな」

「そりゃ、そうだろう。事前にどこかに隠しておけばいいんだからな」

「その部長、誰でもできるって言っているらしいぞ」

「ますます怪しいな。その内、「会に入らないか」なんて勧誘するつもりなんじゃないかな。ムーアの例もあるから気を付けなくちゃあな」
賢は背後の席で自分の話をしているのだと思った。亀田が言った。

「部長、今度の休みは何か計画がおりますか？」

「いや、特に無いけど。土曜日にはV E A S館に行ってみようかと思っているよ。その後で、生活に必要なものでも買い出しに行こうと思っている」

「部長は、ラジコンには興味はありますか？」

「特に無いけど」

「なかなか面白いですよ。今度の日曜日に石狩川の川縁で飛ばすんです。一緒にやってみませんか？暇つぶしにはいいですよ」

雪坂が言った。

「部長、わたしも一緒に、V E A S館に連れて行ってくださいますか？」

「うん、構わないよ。君たちはVEAS館には行ったことあるのか？」
ふたりとも1度だけあると言った。

「VEAS館は今度のMIプロジェクトでつくるVS館と同じ思想で造られているんだ。そのつもりで観ると意識改革の役に立つよ」
雪坂が言った。

「わたし、あまりよく分からなかったんです。石になる体験だったんですけど、途中で飽きちゃって……」

「そうか、一人で行ったんだね。初めは一人の体験は難しいかも知れないよ。今度僕がよく説明してあげるよ」

亀田も言った。

「部長、僕も一緒に連れて行ってくれませんか？」

「構わないけど、3人だと、誰かが一人だけの体験になってしまうよ。ペアの体験の方が、分かりやすいと思うから、誰か女性をもう一人誘ったらどうかな」

「わたし、奥日に声を掛けてみます。あの娘、もう一度VEASに行ってみたいって言っていましたから」

土曜日の朝9時10分前に、賢の車は江別駅前に着いた。既に雪坂の姿があった。雪坂は直ぐに賢の車に気付き、駆け寄って来て助手席に乗った。亀田が奥日をピックアップして来ることになっていた。亀田の車は9時丁度にやって来た。最近流行のSUVタイプの電気自動車だった。賢は今朝WEBで調べて、北海道のVEAS館が自分の家の西方向の、それほど遠くない所に在ることを知った。江別から、20キロほど南の長沼町の牧場の中にある。利便性に恵まれた所に家を借りられたことを幸運に感じた。賢は道央国道と呼ばれる337号線を南に戻るように下った。車の中で雪坂が賢に訪ねた。

「部長、VEAS館ってどういう目的で建てられたんですか？わたしはエンタメにしては、ちょっと面白味に欠けると思うんです。火山のマグマが溶岩となって吹き出して、固まって行くプロセスには違和感を覚えました。「マグマになり切れ」と言われても現実味がないんです。マグマがどんなものか知りませんし、せいぜい溶岩よりもっと流動的なもの

というほどの知識しかありませんから。それでも、その部分は我慢したんですが、その後、冷えて固まってから長い年月が流れる所は、もうただ「つまらない」の一言でした。だって、自分は動かないんですから。周りが変化してゆくのですけど、その変化を観ているだけなんです。それから川の流れに削られて、知らないうちに自分が崩壊してゆく。そして、沢山の砂粒に分解されてゆく。その一粒一粒に意識があるなんて、とても考えられませんでした。砂全体で一つの大きな意識を形作っていて、それからまた長い年月が経って、砂だった自分が次第にミクロの粒子に分解して行って、他の物質と化合して成分が変わったりして、それが土になってゆく。土になると、それが堆積して草木を育てる。自分があらゆる植物を育てているなんて認識できませんよね」

「言ってみれば意識の訓練なんだよ。まだシステム自体が完璧じゃないから、人間の意識にリンクさせにくいんだろうね。その点、植物や動物は石よりずっと人間に近い存在だから、もっと分かりやすいかも知れないね。生命のサイクルも短いしね。今日は動物になってみたらどうかな？ 昆虫でもいいよ」

「わたし、小鳥になってみたいわ」

半時間ほどでVEAS館に着いた。VEAS館は牧場の真ん中に建てられていた。亀田の車がぴったりと付いて来ていた。賢が駐車場に車を止めると、亀田もその横に停めた。車から降りると奥日が言った。

「わたしと亀田君は花の体験を試みることにしました。前回来たときには、あの面白い「アクアの冒険」で英語を勉強していたので、きっと面白いと思って、水の体験を選んだんですが、なんかぴんとこなくて、あまり感激しなかったんです」

「そうだね、水の体験は内容にちょっと道徳的な意識を入れてあるようだから、面白味がないかも知れないね。花の体験は面白いと思うよ。いや、面白いと言うより感動的と言った方がいいかな」

入り口の案内に、『北海道にあるVEASスタジオには仮想動物体験、仮想植物体験、仮想岩石体験、仮想水体験、仮想火体験、仮想風体験の6種類が用意されている。仮想火体験と仮想風体験は試行実験中』と書

かれていた。賢は、近いうちに火と風を体験してみようと思った。捕らえどころの無いものをどのように表現しているのか知りたかった。先ず簡単な身体検査を受けそれから入場した。賢と雪坂がペアになって先に入館し、亀田と奥日がその後が続いた。この館には島根と同じ50種類の植物と30種類の岩石、それから50種類の動物、3種類の水、2種類の火と風の中から好きなものを選ぶことができた。この日は入館客が多く、たった3問の簡単な問診を受けるのに20分も待たされた。全員問題なくパスした。

「鳥は何種類あるのかな？小鳥が好^いって言ったね？」

賢が訊くと、雪坂が目を細めて応えた。

「わたしはウグイスが好きなんです。声がきれいでしょ？」

「春を代表する鳥だからきっとあるだろう」

賢は動物のチケットを2枚と花のチケット2枚を買って1枚雪坂に渡し、2枚を亀田に渡して、中に入った。亀田と奥日も賢達に続いた。入り口を入ると動物、植物、岩石、水・火・風と書かれた4つのエントランスがあった。賢は雪坂を促して動物のエントランスに入った。亀田達とはそこで分かれた。奥に進むと図入りの案内板があった。ふたりは説明書きを読んだ。体験したい動物の種類をスイッチで選択するようになっていた。選択できる種類は原生動物、昆虫、両生類、爬虫類、魚類、鳥類、哺乳類と分けられていた。賢が鳥類のボタンを押すと、先方の壁の奥でマシンが動き出す音が聞こえた。少しして、手前の壁が開いた。これは島根や新宿とは異なった仕組みのようだった。少し行くと鳥の体験と書いてあるペアボックスのシートが現れた。男性用と女性用に分かれたシートだった。賢と雪坂はそれぞれのシートに座った。座席の前にある50インチサイズのスクリーンは他の館と変わらない。ふたりは用意されている3Dグラスの付いたヘルメットを被った。スイッチパネルの下に簡単な説明書きが貼り付けてある。そこには7種類の鳥の写真と番号が書かれていた。予想どおり3番目にウグイスがあった。他の館同様、説明書の横には0から9までのボタンが付いたキーボックスがある。キーを押して好きな鳥の種類を選択するようになっていた。賢は雪坂に

好きな番号を押すように言った。雪坂は3の数字キーを押した。賢は直ぐにスタートボタンを押した。ヘルメットの中で、木を揺らす風のような音がして来た。暫く風の音が続いた後、女性の静かな声で説明が始まった。それは他のVEAS館のガイドとよく似たガイダンスだった。賢はヘルメットの音に耳を傾けた。

「ようこそウグイスの世界にお越しくございました。これから暫くの間、あなたは1羽の雄のウグイスになって頂き、あなたのお連れの方は雌のウグイスになって頂きます。自分の意識を集中して雄のウグイスに成り切ってください。初め、あなたは生まれる前に卵の胚として生きています。あなたは、あなたの母体になる胚盤という組織の中に息づいています。胚盤は母鳥が受精した時に産み出された卵の黄身と、栄養供給源のタンパク質からなる白身に取り巻かれています。胚であるあなたはここからエネルギーの供給を受けて、次第に大きく成長してゆきます。あなたは時期が来るとくちばし嘴で殻を突き破って外に出て行きます。外には母鳥が巣の横で待ち構えていて、あなたを安定した場所に置いてくれます。あなたはまだ伸び切らない羽を動かして身体を伸ばそうとします。目はまだ見えません。お腹が空いてきて口を開けて鳴きます。すると、時々父鳥と母鳥が飛んで来て、あなたの口に餌である小さな虫を入れてくれます。それだけでは十分でないので、あなたは必死にもっと欲しいと叫びます。両親は交互に何度もあなたの口に餌を運んでくれます。あなたの身体は次第に大きくなり、ついに羽を伸ばせるようになります。両親はまだあなたを見守っています。やがてあなたは両方の翼を広げ巣の上で大きく羽ばたきをします。しかし、まだ飛び立つことはできません。両親の鳥は必死に餌を取って運んで来てくれます。とうとうあなたは、自分の翼で飛び立つことができるようになります。両親はその姿を見守っています。まだ危なっかしい飛び立ちですが、一旦隣の木まで飛び、少しずつ距離を伸ばして、終に大空に羽ばたけるようになります。あなたは一周回って巣に戻ります。両親はまだ餌を与えてくれますが、あなたの嘴が大きくなっているので、まるで、あなたが親の嘴をくわえてでもいるようです。やがて両親は来なくなり、あなたは自分で餌を探さな

くてはならなくなります。でも、あなたの目はとてもよく見えるようになっていて、遠くに飛んでいる小さな虫も見つけることができます。あなたは思い切って見つけた虫に向かって突進します。初めての獲物です。あなたはその美味しいごちそうを自分で手に入れることができるようになりました。あなたは空を駆け巡ります。やがて日が経ち、あなたは大人になります。自分の身体の中に、突き動かされるように自分の片割れを探すような衝動が走ります。あなたはその片割れを求めて、思い切り美しい声で囀さえずります。ホーホケキョ、ホーホケキョ。全身で片割れを求めます。やがてあなたの美しい声に惹かれて相手が現れます。あなたの近くであなたを誘い、近づくと逃げるように振る舞います。でも相手もあなたを求めているのです。あなたは小枝の影で相手を捉え、相手と一つになります。そのときはあなたの存在としての最高の時間です。あなたは相手をととてもいとおしく感じます。それから暫くして、あなたの相手の雌鳥は藁や枯れ草をくわえてきて、木の枝に巣を作り始めます。あなたは雌鳥を守るために辺りを警戒します。雌鳥は出来あがった巣の中に卵を産みます。そして、その上に座り自分の身体で卵を暖めます。あなたは雌鳥の分まで餌を探して飛び回ります。やがて卵が孵ります。あなたと雌鳥は子供達の為に必死に餌を取り、巣に戻って大きく開いている子供達の口に餌を与えます。子供達は育ち巣立って行きます。あなたとあなたの相手の雌鳥は、番つがいとなり、交尾を繰り返して、子孫を増やして行きます。そして、終に力が尽きる時がきます。あなたは自分の身を処すときを伺っています。ある日あなたは、風の止んだ川淵に身を置き、川面を横切ります。そのとき、足が水に取られ、あなたの身体は水中に飲み込まれます。あなたは自分の生を全うした、恍惚とした感覚に包まれます。身体は朽ちますが、意識は一旦ウグイスたちの全体の意識の中に溶け込み、また次に生まれてくるウグイスたちの中に息づき始めます・・・」

説明が終わると50インチのスクリーンにデフォルメされた卵の黄身と白身が映し出された。賢は自分が雄のウグイスの胚であることを受け入れた。自分の周囲が黄色い物質で満たされた。その黄色い物質は暖かく、

自分を包んでくれる。自分からその物質の中に沢山の細い管が繋がっていて、その管を通して自分に流れ込んでくるものがある。それを受けると自分の身体がどんどん分裂して増えてゆくのが分かる。それはものすごいスピードで、意識で追うことがむずかしいほどだ。その分裂してゆく自分は全体として一つの存在であることが分かる。まるで黄色い物質が自分自身に変化してゆくようだ。分裂していった自分の部分はそれぞれ独特の形に変形してゆく。やがて大きな目が出来上がった。その目は、周りに出来てきた他の組織に比べて、あまりにも大きい。やがて、自分に手が出来、足が出来てきた。そして、体中から毛が生え出してきて、手は羽に変化していった。やがて、その場が自分の居る場としては狭すぎるように感じてきて、身体を丸めていることができなくなってきた。自分にくちばし 嘴があることに気付いた。そこで、嘴で外側の壁を突いてみた。バリッと音がして壁にヒビが入った。両足を伸ばすと、その壁も崩れた。羽になった手を伸ばしてみた。壁はもろくも崩れ去り、身体が広い空間に現れ出た。近くに大きな鳥が居る。それが母鳥であることを直感的に感じた。殻の外に出ると、母鳥が殻を食べ始め、間もなくすっかり食べ尽くしてしまった。母鳥は羽を広げて歓びを表現した。嘴で自分を押し安定した位置に動かしてくれた。自分の横には2つの大きな丸いものがある。その丸いものからも母鳥より小さな鳥が出て来た。母鳥は先ほどと同じように、抜け殻を食べ尽くし、そして自分にしてくれたように、その小鳥達を自分の横に並べた。やがてもう1羽の大きな鳥が口に小さな虫をくわえてやって来た。それが父鳥だと分かった。父鳥は自分の口の中にその虫を押し込んだ。押し込むと、父鳥はまた飛び発って行った。自分はその虫を飲み込んだ。とてつもない歓びが感じられた。しかしお腹は満たされない。もう少し欲しいので、大きな口を開けて叫んでみた。先ほど父鳥が飛んで来た空を見上げた。空は青く、木の枝が自分と空の間に覆い被さるように揺れている。父鳥がまた戻って来て、今度は隣にいた小鳥の口に虫を入れると、再び空に舞い上がった。次はその横のもう一羽の小鳥の所に餌を持って来た。その次は自分の番だった。それが繰り返された。自分の身体は次第に大きくなってきた。羽に

なった手を思い切り伸ばしてみた。翼は自分の身体より大きく広がった。父や母の真似をして動かしてみた。枯れ草で出来ている囲いの縁に立って、空に向かって両手を羽ばたいてみた。身体がフワッと空に舞い上がった。気持ちが良い。しかし長い間空中に浮いていることは出来なかった。下の方の突き出ている木の枝に、かろうじて縋り付いた。ふと見ると斜め上の大きな枝に、父と母が止まって居て、自分のことを見つめている。うれしさが込み上げてきた。もう一度羽ばたいてみようと思った。思い切り両腕を動かして羽ばたいてみた。今度は上手く空に浮き上がることができた。必死に羽をばたつかせ、やっとの思いで元の枯れ草のある巣に戻ることができた。急にお腹が空いてきた。父鳥が大きな虫をくわえて飛んで来た。自分は大きく口を開けて、その虫を貰いたいと叫んだ。父鳥は虫を自分の口の中に入れてくれた。もう少しのところ父鳥の嘴を噛んで仕舞いそうになった。今度は自分で虫を捕りたいと感じた。周りを見回してみると、ずっと遠くに小さな羽虫が飛んでいるのが分かった。思いきってそこまで行ってみようと思った。大きく翼を広げ羽ばたいてみた。羽虫は飛び廻っている。自分は空を滑空して、虫めがけて突進した。一瞬で羽虫を嘴に捕らえることができた。羽虫は自分の嘴の間でばたばたしている。自分は翼を羽ばたき上空に舞い上がった。空は晴れ渡り、身体に降り注ぐ太陽の日差しが心地よい。そこは池の畔だった。池の上空を一周回って、見知らぬ木の枝に止まった。羽虫はもう動かなくなっていた。嘴で羽虫を噛み砕いて飲み込んだ。満足感が体中に走った。今度は池の上を飛んでみることにした。今まで見たこともない無限に広がる自然の姿が目に見え込んできた。体は風に浮き、この自然と自分が一つであるような至福に包まれた感覚を覚えた。暫く空を旋回してふと上方に意識を移すと、自分より大きな体の黒い鳥が、ずっと上の方を飛んでいる。それはとても恐ろしい姿だった。その鳥がカーカーと啼いた。急いで小枝に戻り、葉の茂る小枝の中に身を隠した。黒い鳥は飛び去って行った。自分は父と母の元に戻ることにした。枯れ草の巣に戻ろうとすると、母が自分を追い払った。何かの間違いだらうと思った。仕方なく、池の周りを一周してからもう一度家に帰ってみた。しか

し、今度は父が自分を家に寄せ付けなかった。自分は寂しかったが、仕方なく一人で生きることにした。毎日虫を捕って食べた。空を飛び、枝で遊んだ。春風が心地よいある日、何かに突き動かされるような感じがしてきた。近くの枝から、ホーホケキョと唄う声が聞こえる。自分も負けずに唄った。ホー、ケキョ、ケキョ、ケキョ、ホーホケキョ。自分の方が美しい声だと思った。もう一つの声も、歌い続けている。自分も負けずに唄った。そこに、美しい雌の鳥が飛んで来た。どうやら、自分の唄った声に惹かれたようだ。その雌に向かって思い切り、きれいな声で歌った。ホーホケキョ、ホーホケキョ、ホーホケキョ。雌は自分の直ぐ近くの枝に飛んできて止まった。自分は急いで雌の近くに飛んでいった。しかし、雌は隣の枝に移ってしまった。もう一度歌を唄った。ホーホケキョ、ホーホケキョ。雌は太い幹と小枝の間に身を寄せた。自分が近づいてももう逃げない。一步ずつにじり寄って、一気に美しい雌の上に跨った。雌は交尾を受け入れてくれた。その瞬間は全ての生き物が一斉に歓喜を表してくれているようだった。自分は全体と一つだと感じた。そして、その中から新しい命が生まれてくるのが分かった。恍惚の中で、エネルギーを放出した。雌から歓喜が伝わってきて、自分と雌は一体になった。やがて激しい鼓動が収まり、自分は雌から離れた。雌がとても愛おしく感じられてきた。雌は自分に寄り添って、嘴で自分を突いた。自分は天にも昇る心地がして、大空に舞い上がった。太陽が自分たちを祝福してくれていた。陽が沈み、そしてまた昇った。日にちが経ち、寒い冬を越した。次第に、木々が芽吹き始める頃、自分は雌が出産できるように、巢の用意をしようと思った。しかし、雌は自分で巣作りを始めてしまった。枯れ草を集めて太めの枝の分かれ目に運んでいる。自分は外敵が襲って来ないように番をしていた。雌は枯れ草を何度か運んで、漸く巢の形が出来てきた。巢が出来上がると、雌はそこに卵を産み付けた。初めに1つ産んだ。次の日にまた一つ、そして3日目にもう一つ産んだ。雌は卵の上に載って暖め始めた。自分は大きな虫を捕まえて来て、雌の近くに置いた。雌は知らんぷりをしていたが、自分が飛び発つと虫を啄んでいた。やがて一つの卵が孵^{かえ}って、雛が姿を現わした。雛は次々

に卵を割って出て来た。それは、自分の生命の一部分のように感じられた。雌はその卵の殻を啄んで食べてしまった。自分は餌を採って来て雛たちに運んだ。何度も何度も運んだ。やがて1羽の雛が翼を広げ、巣から飛び出した。しかし、飛べずに地面に落ちてしまった。自分は直ぐに餌の毛虫を捕まえ、小枝の上から雛を見守っていた。雌も隣に来て見守っている。雛は必死になって羽ばたき、漸く小枝にしがみついた。そして、羽をばたばたさせて体制を入れ替え、大きく羽ばたきして空に飛んだ。自分と雌は歓びに包まれた。雛はやがて小枝を小刻みに飛んで巣に戻った。自分は直ぐに雛に餌を与えた。2匹目も3匹目も同じように飛び発つのを見守った。やがて、3匹は自分で飛び、自分で餌を取れるようになった。自分と雌は強く巣立たせるため、子供達が戻って来ると取えて追い返した。それを繰り返す内に子供達はもう、戻って来なくなった。自分は一つの使命を果たしたと思った。それから子育てを繰り返した。何度目かの冬を越えた頃、自分の身体が十分に機能しなくなった。自分は身体を自然界に戻そうと思った。風のない穏やかな初春の日、川の流れを眺めて木の枝に止まっていた。川の流れは生命を育てているのが分かった。自分はその川の上を滑空して向こう岸に渡ろうとした。しかし、途中で力尽きて川の水に足を取られそのまま流れの中に落ちた。雌が木の枝の上で、自分を見つめていた。自分は雌をととても愛おしく感じた。やがて意識が肉体から離れ、沢山の仲間達の居る世界に誘われるのを感じた。そこからは新しい生命が巣立って行くのを観た・・・その時、また、画面に木々の映像が映し出され、暫く風が立てる木の葉の揺れる音が続いてから、優しい女性の声が聞こえて来た。

「さあ、今あなたはウグイスの卵の胚から、母のぬくもりの中で雛に孵り、親に育てられ、飛び発ち、パートナーを見つけ、子供を授かり、自分の勤めを終えて、子供達に命を移し、自ら仲間の集う意識の世界に還って来ました。これから次第に元の人間に戻ります。時間を掛けて、このVEASのブースに入って来た自分を思い浮かべ、自分に返ってください・・・」

それから3分間ほどヴィヴァルディの四季の第1楽章が流れ、フェード

アウトした。賢は呼吸を整えてからヘルメットを外した。雪坂に目を移すと、彼女も丁度ヘルメットを外すところだった。賢は雪坂を促して出口から外に出た。

「どうだった？」

「とても素晴らしかったです。このまえよりずっとリアリティがあって、空を飛んでいるときは、自分がウグイスになった気分になりました。でも、この間部長がすすき野の空に連れ出してくれたときの方が、迫力があつたように感じました。それより部長がわたしの上に乗って、部長とわたしが一体になる場面の方が真に迫っていて、ドキドキして心臓が飛び出すんじゃないかと思いました」

「と云うことは、君はウグイスになり切っていたのかな？」

「部長はどうだったんですか？」

「僕はウグイスになっていたよ。とても素晴らしかった。自分が自然の一部だという認識が湧いてきて、身体が歓びで満たされるのを感じていたよ」

「わたしは、自分がウグイスなんだと思いながら、体験をしていました。空を飛ぶときは、ウグイスならこういう風に飛ぶんだと思っていましたし、地面の見え方も人間と違うように思っていました。雄のウグイスの声を聞いたときは、部長が雄の役をやっていると思うと、ついわくわくしたりして顔が熱くなりました。半分ウグイスで半分人間とでも謂うか妙な感覚でした」

「雪坂さん、VEASでは、自分を忘れて、そのものになり切った方が、もっとリアルで面白いよ。確か、君は思考が消えていたんじゃないかっけ？」

「VEAS館に入ったら、逆に思考がよく働くようになりました。どうしてでしょう。部長の影響かな？」

出口の外で立ち話していると、奥日と亀田が出口に現れた。

「素晴らしかったわね。わたし、自分が花になっちゃったような気がして、サクランボになったときは感動して涙が流れてきたわ」

「そうだね、俺も花粉を飛ばすときは、本当の桜になったみたいな感覚

がしたよ。実際あんな風なのかな？」

賢は祐子と行った新宿のVEASを思い出した。あのとき感じた祐子との一体感は言葉では言い表せない至福の感覚だった。この日の雪坂との体験では、自分に個としてのウグイスの意識が残っていて、自分の目を通して全てを覗いていた。VEASの体験は、体験する者の意識の状態で、いろいろ変化するということが分かった。4人は途中で昼食を摂った。食事を終えると、賢は一旦家に戻ることにした。雪坂が買い物を手伝うと言ったが、賢は「他にもしなければならぬことがあるから」と言って断った。雪坂は亀田の車に同乗して、江別に送ってもらうことになった。賢は長沼のスーパーマーケットに立ち寄り、1週間分の朝晩の食料を購入した。主にパンや、ピザそれにレトルト食品を買った。コーヒーや茶などは愛子と梓が用意してくれてあった。スーパーを出ると、近くのドラッグストアに寄り、ティッシュやトイレットペーパー、石けん、歯磨き粉などの消耗品を買った。賢はこれで生活できると思った。長沼から家までは20分ほど掛かった。家に着くと、郵便受けに宅配業者からの連絡用紙が入っていた。電話を掛けると荷物が届いているとのことだった。賢は直ぐに持って来て欲しいと伝えた。それから2時間ほどして、宅配業者がダンボール箱12箱と布団と思われる大きな包み2つを運び込んで来た。全て梓からの荷物だった。賢はもしかしたらと思い、スマホを確認してみた。案の定、着信のランプが点いている。梓からのメッセージが録音されていた。

「あなた、わたくしの荷物、送りました。日暮里のアパートを引き払い、今、愛子さんのアパートに泊まっています。来週の土曜日の朝の便でそちらに向かいます」

賢は直ぐに梓に電話を掛けた。

「梓、もう荷物を送ったのか？そっちが不便になっちゃうだろう」

「いいえ、大丈夫です。最小限のものを残しました。それらは後で処分するか、スーツケースに詰めて持って行きます。早い方が良いと思いましたが。それに、あなた宛のものも一緒に送りたいかったから。箱に番号が書いてあるでしょう。No. 1は直ぐに開けてください。食べ物」

入っています。あなたのことだから、毎日ピザやレトルトばかり食べているんじゃないかと思って、電子レンジで温めれば食べられるものを送りました。ご飯のパック、カレーや、スパゲティそれにみそ汁やスープのパックもありますから、入れ物に書いてあるレシピを見て、その通りに電子レンジでチンして戴いてくださいね。一人で暮らしていると、栄養が偏ってしまうでしょう。ちゃんと食べてくださいね。それから、2つめの箱はティッシュやトイレットペーパー、それに洗剤などが入っています。必要になったら開けてください。そちらでも買えると思いますが、念のために送りました」

「ありがとう。梓はおふくろみたいだな。来週の土曜日は空港に迎えに行くからね」

「ありがとうございます。あなたのことだから、きっと来てくださると思っていましたが、でも、ちょっと不安だったんです。安心しました」

「ところで、仕事の方はどうだ？」

「それが、あまり上手く行かなくなってきたんです。見かけ上はスケジュール通りに進んでいるようですが、政務次官や5社の代表が久保蔵さんをあまり重要視していないようで、うちの会社の発言力が弱まってきているように感じる事が多くなりました。一つには、仮想ビレッジの計画を座礁させたことが影響しているようです。それと、やはり、あなたに対する信頼が厚かったのだと思います。社内では、あなたに対する人事について、よく、批判的な意見を耳にします・・・そちらはどうですか？あの噂の札幌支社の総務部長はどんな感じの方ですか？」

「こちらの仕事は、それなりに順調にしているよ。まだ始めたばかりだから何とも言えないけどね。周囲の人たちもみんないい人達で、とても良い環境だよ。総務部長の安芸津さんも、口は悪いけど、心はそれほど悪い人じゃなさそうだよ・・・それより、梓、こっちに來たら、一緒にVEASに行こう。今日、会社の仲間と行ってきたら、テーマの中に、風とか火とか云うのがあったんだ。それに動物のテーマが50種類もあって、ウグイスの体験をしたんだけど、その時、自分の意識で体験内容のレベルが変わることに気付いたんだ。それで、ちょっと面白いことを

考えたんだ。今度のVS館に、人間をテーマにした仮想体験を盛り込んだら面白いんじゃないかと思ってね。特に愛について学んで貰うのは、こういうシステムでも十分な効果があるかも知れないと思えてきたんだ。誰でも人間としての沢山の体験を持っているだろう。だから、簡単に仮想の世界に入れるんじゃないかと思ったんだ」

「なるほど、それは面白そうですね。早くそちらに行きたいです。あと、1週間ですから、待っていてくださいね。女房が行くまでね」

電話を切ると、賢は夕食の準備に掛かろうとした。レトルトのピザを電子レンジで温めるだけで済ますつもりだった。そのとき電話が掛かってきた。壁の暖炉の上の電話を取ると、雪坂だった。

「もしもし、部長ですか？わたし、雪坂です」

「雪坂さん、どうしたの？」

「部長、夕飯はどうされますか？」

「ピザを食べようと思っているよ」

「わたし、夕飯を作って来ました」

「えっ？作って来たって、今何処に居るの？」

「家の前です。部長、玄関の扉を開けて頂けませんか？手が塞がっているんで……」

賢が入り口のドアを開けると、雪坂が両手に大きな袋を提げて、立っていた。賢はドアを大きく開け広げた。雪坂が「失礼します」と言って、家の中に入って来た。

「凄いい荷物ですね。どうしたんですか？」

「うん、田辺部長の荷物だよ。来週転勤して来るんだ」

「どうして、田辺部長は、部長の所に荷物を送ったのですか？」

「一緒に住むことになるかも知れないからね」

「えっ？同棲ですか？」

「うん、そう云うことになるかな」

雪坂は袋を下げて、キッチンの方に向かって歩いて行った。もう陽は傾き掛けていた。賢は部屋の明かりを点けた。キッチンの奥から雪坂が言った。

「部長、今晚、泊めて頂けませんか？」

「雪坂さん、僕は独身の一人住まいだよ。そんなところに泊まったら、補償できないよ」

「補償して頂かなくても、いいです」

「そうか、それなら、僕は構わないけどね。ベッドルームも2つあるしね」

賢は、了解しておいて、「まずいかな」と思ったが、結局、「まあいいか」と簡単に妥協してしまった。雪坂は一つの袋から食器類と箸を取り出すとテーブルの上に置いた。それを見た賢が言った。

「わざわざ食器や箸を持ってきてくれたの？あらかじめ言ってくれば全部、引き出しの中にあっただのに」

「いいえ、部長。わたしの好きな食器と、お箸で戴いて欲しいから」
そう言いながら、雪坂はもう一つの袋から回鍋肉と海老チリソース、それにチャーハンを出し、カップに入った酸辛湯を取り出して、それらを電子レンジで暖めると、テーブルの上の皿やカップに移し替えて並べた。一通りの料理が並ぶと、雪坂は袋から紹興酒を取り出した。

「部長、紹興酒は飲めますか？」

「たまには紹興酒も良いね」

そう言いながら賢はテーブルの近くに行き、覗き込んだ。

「凄いな、本格的な中華料理じゃないか。みんな君が作ったの？」

「はい、と言いたいところだけど、わたしの手作りはチャーハンだけなの。あとは、シーアンのテイクアウトなんです・・・部長、紹興酒は暖めますか？」

「うん、暖かい方が美味しいね。それにしても、随分重かっただろう」

「ううん、平気。電車もタクシーもあるから、大したことなかったです。部長、ほら、紹興酒のザラメもグラスも持ってきたのよ」

「雪坂さん、どうしてここまでするの。まるでパーティじゃないか」

「部長、怒ってますか？・・・ごめんなさい」

雪坂は下を向いてしまった。

「馬鹿だな、そんなことはないよ。感激しているんだ。こんなに一杯。

本当に重かっただろう。指や腕は大丈夫か？」

雪坂は賢に両手を広げて見せた。指の付け根が赤くなっていて、紐の痕がはっきり残っている。賢は、感謝の気持ちで一杯になった。ふたりは先ず、紹興酒で乾杯した。チャーハンは少し塩がききすぎていたが、賢は嬉しくて、塩辛さなどはどうでもよかった」

「雪坂さん、ありがとう。とっても美味しいよ」

「チャーハン、少し味が強すぎたかな？」

「いや、とっても美味しいよ。忙しかっただろう」

「昨日のうちに全部予約しておきました。やっぱりお店の料理は美味しいですね。わたしのは落第です」

「そんなことはないよ。僕はこの中で、君のチャーハンが一番好きだよ。君の心が入っているからだろうね。それに君が美しいから、料理が一層美味しくなる」

賢は本当にそう思った。雪坂は一途で美しかった。雪坂は目に涙を溜めた。唇を噛み締めて言った。

「わたし、そんな風に言って頂いたの、生まれて初めてです・・・みんな、綺麗だとか美人だとか言ってくれますが、目が本当じゃないんです」

雪坂はこの日も、一人で入浴することができなかった。やはり着替えは持って来ていなかった。月曜日と同じように、賢は自分の下着とパジャマを貸し与え、雪坂が入浴を終えるまで廊下に出て、洗面所の前で待っていた。賢も続いて入浴した。賢がシャワーを浴びて出てくると、雪坂は、浴室の入り口で待っていた。しかし、この日は賢が浴室から出てくると、手に持っていたバスタオルを手渡してから、恥ずかしそうに隅の方に行って背を向けた。ふたりは一緒に寝室まで行った。賢はそこで暫く瞑想をすることにした。雪坂は瞑想している賢の姿を、黙ってじっと見つめていた。やがて賢が瞑想を解くと雪坂が言った。

「部長、今日は、わたしは、どうなっても大丈夫です」

「心配要らないよ、何もしないから、安心して寝ていいよ」

雪坂は頷いた。ふたりは両端に分かれてベッドに潜り込んだ。少しする

と雪坂が言った。

「部長は、恋人とは結婚しないとおっしゃいました。そして、仕事の同僚だった田辺部長と同棲しようと言われてます。もしわたしが部長のことを好きになってしまったらどうされますか？」

「僕も、君のことは好きだよ。だけど、お互い好きでも良いんじゃないかな。友達なんだから、たとえ恋人がいようが同棲していようが」

「でも、好きになるって恋することですよ。一人ではいられないほど、好きになってしまうことですよ。そうしたらどうしますか？」

「もし、僕も君のことを、離したくないほど深く愛してしまったら、意識の赴くままにするしかないな」

「それは、わたしのことを抱くということですか？」

「それは、そのときの状況次第だろう。理屈じゃないから、そうやってみないと分からないよ。ただ、自分を誤魔化したり、偽ったりはしないつもりだ。その結果、会社を首になろうが命を落とすことになろうが、それは大したことじゃないからね。自分自身に忠実に生きられればその方がずっと、ずっと素晴らしいと思うよ。この人生の、その瞬間は2度と巡って来ないんだから」

雪坂は賢に背を向けて寝た。しかし、いつまでも寝付けなかった。賢は、ベッドの中で再び瞑想をし、祐子と亜希子にコンタクトを取ろうとしたができなかった。ふたりとも何かに没頭しているようだった。賢は雪坂を意識しながら、眠りに落ちた。翌朝、目が覚めると、雪坂の姿が無かった。ベッドの上に賢のパジャマがきちんと畳んで置いてある。賢は洗面所に行って見たが雪坂の姿は無かった。リビングルームに行ってみると雪坂はキッチンで立ち働いていた。賢の姿を見ると言った。

「おはようございます」

「おはよう、眠れたか？」

「いいえ、ほとんど眠れませんでした」

「そうか、やはり床が違くと寝苦しいのかな。今日はきっと辛いね」

「いいえ、意外と頭はすっきりしています。わたしは、食事の支度をしたら、アパートに帰ります」

「僕が送って行くから、一緒に食事をしよう」

「いいえ、自分で帰ります。一緒にお食事すると辛いですから。それに、部長にご迷惑をお掛けしてはいけませんから・・・」

「それじゃ、駅まで送るよ」

賢は直ぐに寝室に戻って着替えると、洗面所に行って顔を洗い、身だしなみを整えてリビングルームに戻って来た。およそ4、5分だったが、すでに雪坂の姿は無かった。外に出てみたが、姿は見当たらない。賢は諦めて家に戻った。食卓には賢の食事の支度だけしてあって、持参した箸が置かれ、オムレツと白菜の漬け物、みそ汁とご飯が食べるばかりにして並べてあった。器も箸も全て、昨日雪坂が持参したものだ。食事を済ませ、食器類を洗って棚に戻そうとすると、隅の方に、”AZUSA”とサインの入った食器類を避けるように、昨日雪坂の持ってきた皿や茶碗がきちんと並べて入れてあった。賢は雪坂の支度してくれた食事を食べた。みそ汁は塩加減が足りなく、すまし汁のようだった。オムレツも形が崩れていたが、形を整えようと努力した形跡が見える。食べてみると、やはり卵の味しか感じられなかった。しかし、賢は自分の目に涙が浮かんでくるのを覚えた。雪坂のことが愛おしく感じられた。賢は箸を置くと、直ぐに駐車場に向かった。由仁駅まで行ってみることにした。国道に出る一本道をとぼとぼと歩いている雪坂の姿が見えた。賢は徐行して雪坂の前に出ると、車を停めた。

「雪坂さん、君に済まないことをしたと思って・・・一旦、僕の家に戻ろう」

雪坂は、下を向いたまま頷いた。賢は一旦車を降りて、助手席の扉を開けた。

「さあ、乗って」

雪坂は顔を上げた。顔に微笑みが伺えた。

「雪坂さん、君のことを康子って呼んで良いかな？」

「はい、わたしもその方が嬉しいです」

「その代わりに、ふたりで居るときは、僕のことを部長って、呼ばないで、賢と呼んでくれるか？」

「いいんですか？」

「ふたりきりの時は、会社の仲間じゃなくて、僕の友達として付き合いたいから」

「部長、いいんですか？わたしのよう、身寄りのない女なんかと友達になっても？」

「ほら、また部長って・・・君の気持ちが嬉しくて、じっとしてられなくなっていて、追い掛けて来たんだ。朝食、ありがとう。君は食べたの？」
康子は首を横に振って、賢を見つめ、微笑んだ。賢は家に戻ると、康子の食器類を出しながらソファの横に立っている康子に言った。

「オムレツは少し手を付けちゃったけど、ふたりで一緒に食べよう」
ご飯を茶碗に盛り、椀を手にとると、康子が駆け寄って来た。

「部長、わたしがやります」

そう言うと、康子は賢が持っている椀を取ろうとした。身体が賢の前に向くと、康子の顔が賢のすぐ前に来た。目の潤んだ、肌の透き通るような美しい顔だった。賢は椀を置いて、康子を抱きしめ、口づけをした。康子の肩がガクッと落ちた。康子は「ふっ」とため息を吐いた。そして、目を伏せるようにしながら椀を持ち、みそ汁を椀に注いだ。賢はテーブル席に戻った。康子はみそ汁の椀を持って来てテーブルに置き、自分も賢と向かいの席に腰掛けた。ふたりは黙って食事を始めた。康子はずっと下を向いたままだった。賢が言った。

「ごめんね、もっと優しくしなければいけないのに。つい自分の保身を意識してしまって、君がこんなにしてくれるのに、それに気付かないなんて・・・」

康子は首を振った。

食事が済むと、康子は片付けをした。賢はソファに座って康子の様子を見ていた。康子が鼻歌を歌っているような気がした。声には出していないようだったが、その声は賢の脳裏に聞こえてきた。あのプロジェクトXのテーマソングのようだった。後片付けを終えて近くに来ると、康子は賢の座っているソファの横に立っていた。

「康子、こっちにおいで」

康子は賢の横に座った。賢は康子の肩を引き寄せて口づけした。康子は、全身の力が抜けたようになっていた。賢の強い抱擁で、康子は賢の肩に廻した手に力を入れた。

「本当は、腕や肩が痛いんじゃないか？」

康子は頷いた。そしてぽつりと言った。

「今朝、とても悲しかったです」

「田辺部長のことか？」

康子は首を横に振った。

「部長は、昨夜わたしに指一本触れませんでした」

賢は康子の肩を抱き寄せ強く口づけた。康子は賢の強い腕の力に意識が遠のくような感覚を覚えた。身体全体が歓喜に包まれた。

「ごめんな、君に辛い思いをさせてしまって」

「・・・可愛そうと思っているんですか？」

「ううん、我慢の鎖を解いたんだ」

康子は賢の背中に手を廻して抱きついた。目を閉じて賢に抱きしめられたまま、小さな声で呟いた。

「会社を辞めてもいいって・・・」

ふたりは暫く抱き合ったままでいた。

瞬く間に1週間が過ぎ去った。賢のV S 館運営の構想もできあがり、支社長、支店長に対する説明も終えた。初めMIプロジェクトを斜視していた支社長も、賢のプロフィットについての考え方が、支社・支店の経営の改善を図る内容になっていたため、かなり積極的に受け止めるようになってきた。賢はしばしば呼び出され、詳細な説明を求められた。賢は毎日、康子と共に昼食に出掛けた。初めの内、賢を誘っていた奥日や江梨は、次第に遠慮するようになっていった。賢は毎日残業をしていたので、康子は賢と夕食を共にすることはできなかったが、木曜日の夕方、賢が8時過ぎに家に帰ると、康子が家の前で待っていた。外は寒さが身に染みるようになってきていた。賢は誰も居ない暗い家の前で康子を抱きしめた。康子の身体は冷え切っていた。賢は康子連れて、近くの中

華料理のレストランに行き、康子に熱いスープやシュウマイなど身体の温まる食事を食べさせた。その晩、賢は康子と共に過ごした。

「部長、わたし、どうしたらいいんでしょうか？」

「もう、只の友達を超えてしまったね。僕は大勢の女性を愛してしまった。そして、今も愛し続けている。勿論、君のことは本当に愛している。だけど同時にみんなを愛していることも真実だ。それが僕なんだ」

「わたしは、もう部長しか愛せません。今まで、大勢の男性を見てきました。何人かの男性とも付き合いました。みんな、性欲や支配欲に駆られてわたしと付き合っていました。愛という言葉の影に、そういう感情が隠れていました。そして付き合いが深くなると、そういう感情が表面に出てきて何時も裏切られました。わたしは自分から身を引きました。そういうことが続いて、誰もわたしに近付かなくなりました。ミス北海道だから近づき難いというのは表立った理由で、本当はわたしが冷たい女だと見られるようになった為です。わたしは彼らの中に愛のぬくもりを感じませんでした。結婚しようと言われたことも何度かあります。結婚してわたしを所有しようとしていたのです。わたしの心の中にはいつも身を切るような孤独な風が吹き荒れていました。でも部長は他の男とは違うということがはっきり分かります。部長の腕の中にいるときは、思考が止まってしまう。部長には深く愛されていると感ずるのです。わたしが生きていると思えるのは、部長と居るときだけです。ただ欲だけがあるのです。部長と一つになった自分しか居ないという感覚です。こんな風になってしまった自分を、どうして良いのか分かりません。いつも、いつも部長の側に居たいけど、それはできないし……」

「康子、自分を解放して意識を僕に向けて生きれば、そんな渴望は消えてしまうよ。僕はいつも君の意識と繋がっているから」

金曜日の朝、賢は一旦札幌駅に寄り、康子を降ろしてから出社した。康子は寂しげだった。その日康子は午後半休をとって帰宅した。賢にその理由も言わなかった。

土曜日の朝、賢は梓を迎えに空港に向かった。梓は大きなスーツケースを引き、大きなショルダーバッグを肩にかけて現れた。

「あなた、迎えに来てくださってありがとうございます。やっと希望が叶いました」

「朝食は摂ったのか？」

「いいえ、まだです。あなたは？」

「僕も、まだだよ。一緒に食べようと思ってね」

「でも、わたくし、早くあなたの家を見てみたいわ。荷物のこともあるし」

「布団はベッドルームに入れておいたよ。あとは君から聞いた種類ごとにその場所に置いてあるから、今日の午後にでも片付けたらいいよ」

「わたし、早く見てみたいです」

「わかった、一旦家に帰って、それから早お昼を食べに出ようか？」

「はい・・・どんな家かしら、楽しみだな」

由仁に入り、国道から抜けて一本道に入ると、周囲は草原ばかりで建物の影が無くなった。梓が言った。

「何にも無い所なんですかね？」

少しして右手に一軒の大きな庭のある家が現れた。まだ新しく見える家だ。

「ここだよ」

賢は駐車場に車を停めた

「すごいわ！こんな立派な家を借りたんですか？確か家賃は大したことないっておっしゃいませませんでしたか？」

「うん、普通のアパートと変わらない家賃だよ。裏には牧場も付いているし」

「すごいですね。だけど、何か条件があるんでしょう？」

「この前も言ったけど、最初の条件は『お化けが出るけど、我慢すること』と謂うことだった。それから、2番目は『ポルターガイスト現象が起きる』ことかな」

「何ですか？お化けとか、ポルターガイストって、この間言っていた幽霊のことですか？」

「そう、本当に出たんだよ。だけどお化けにはもう、霊界に戻って貰っ

たから今は出て来なくなったよ。ポルターガイストは家の中の物が自然に浮き上がったり、動き回る現象だけど、原因となっていた歪みを発生させている二つの岩盤の意識を調和したから、今のところ収まっている」

「そうなんですか？」

「まあ、中に入ろう」

梓は怪奇現象にあまり関心を示さなかった。賢は梓のスーツケースを引きながら玄関に向かった。梓はショルダーバッグを肩に掛け、辺りをきょろきょろ見廻しながら賢の後に附いて行った。入り口の前で梓が立ち止まった。

「あなた、誰か居ませんか？外に誰か居るような気がします」

「ここは人里離れた1軒屋だから、近所の人に来るわけないし、気の所為じゃないか？」

「そうかしら」

ふたりは家の中に入った。梓は2重になっている扉をよく知っている。実家の入り口もこの家と同じような造りになっていた。しかし、実家は2階建てでこれほど大きな家ではない。庭も狭い。梓は浮き浮きしてきた。キッチンに入って行きあれこれ見ている。梓の楽しそうな様子を見つめていて、賢はふと自分に向けられている意識を感じた。それは、敵意のあるものではなく、愛情に満ちたものだった。賢は意識を祐子に移してみた。祐子ではない。亜希子にも移してみた。亜希子でもなかった。自分の意識を全方位に全開してみると、その意識が家の外、玄関の脇の窓際から来ているのが分かった。賢は入り口のドアを開け、外を覗いてみた。庭の木陰に人影がある。康子だった。賢は康子に近づいた。

「康子、どうしたんだ？昨日も半休して、具合でも悪いのか？」

「何でもありません。部長、いいえ・・・賢さん・・・わたし、我慢できなくて、来てしまいました」

「中に入れよ。今、田辺部長も来ているから」

「でも・・・わたし・・・」

賢はもじもじしている康子の手を引いて家に入った。キッチンの方から梓の声がした。

「あなた、どうされたのですか？どなたかいらっしゃいましたか？」

「うん、同僚の雪坂さんが来ていたんだ」

賢は梓をソファの近くに呼んで、そこで康子と顔合わせをさせた。梓に対して自己紹介をしてから、康子が言った。

「あの一、わたし、お手伝いをしようと思って来ました」

梓は康子の心が揺れているのを見て取った。賢が言った。

「ありがとう。だけど、大体片付いているんだよ。元気がなさそうだけど、朝ご飯は食べたのか？」

「いいえ、あまり食欲が無くて……」

「そうか、少ししたら早お昼を食べに、一緒に出よう」

荷物の整理は後回しにすることにした。康子はキッチンに梓が立っていたことで、自分の立ち入れる場所がソファの周りだけになってしまったことが悲しかった。

昼食は長沼町のファミリーレストランで摂ることにした。梓はハンバーグ定食を頼んだ。賢はマルゲリータピザを頼んだが、康子はコーヒーだけでいいと言った。賢が言った。

「雪坂さん、食事を摂らなくては駄目だよ。どこか具合でも悪いのか？」

康子は首を横に振った。そして、

「それじゃ、メキシカン・サディーヤを戴きます」

食事が運ばれて来た。メキシカン・サディーヤは2切れのサンドイッチだった。野菜サラダが添えてあった。食欲が無いと言っていたが、康子は直ぐに平らげてしまった。賢はそれを見て、少し安心した。梓が言った。

「雪坂さん、どんなお仕事をされているのですか？」

「わたし、書類の作成や翻訳などを担当させて貰っています」

「翻訳もするのですか。北海道でも外国語の資料を扱うことがあるのですね」

「はい。取引に必要なケースはあまりありませんが、ユーザーの中に外国資本の企業が3社ありますので、その会社の本社からの要求などを、そのまま受け取ったりしたときには、それを翻訳する必要があります。

特に売買契約などをするときには緊急対応が必要で、本社に依頼できないような場合は、支社で翻訳したり契約書を作成したりします」

「それは、なかなか責任の重い大変な業務ですね」

「はい。でも、やり甲斐があります」

ふたりの会話を聞いていた賢が言った。

「雪坂さんは、ミス北海道になったことがあるんだよ」

「凄いですね。美人ですからもてるでしょう」

「いいえ、それほどでもないです」

食事が済むと、康子は家に帰ると言った。悲しそうだった。賢が言った。

「雪坂さん、はるばる来てくれたんだから、夕方まで一緒に居てくれな
いかな？」

康子は頷いた。賢は2人を連れて家に戻った。家に入ると、3人は一旦ソファに腰掛けた。梓がコーヒーを入れると言って、直ぐにキッチンに立った。康子は賢に向かって小声で言った。

「ぶ・・・賢さん、わたし辛いです。とっても。もう、わたしの入る余地は無いでしょう」

「そんなことはないよ。僕たちは友達だろう、何時だって心の中に存在しているよ」

「でも、他の方と一緒に生活したら、もう会えないわ」

「それは、狭い考え方だよ。心は無限だよ。いつも君は僕の心の中に居るよ」

「そんなの、詭弁です。だって、もう一緒に過ごすこともできないでしょう」

そのとき、梓が盆に受け皿とセットのコーヒーカップを3つ載せて持って来た。賢の所にはKenと言う文字の書かれたもの、康子の所には、康子が持って来て、食器棚に置いておいたもの、自分にはAzusaと書かれたものを置いた。シュガースティックとミルクも忘れなかった。

「何をお話ししていたの？深刻そうな顔をして・・・」

梓が言うと、賢が応えた。

「雪坂さんは寂しいんだ。祐子と同じ、天涯孤独なんだ・・・雪坂さ

ん、いつでも好きなときに僕らの所に来たらいいよ。僕たちは全てオープンで生きているからね。君のような素敵な女性は歓迎だよ」

梓も言った。

「わたくしも歓迎します。ぜひいらしてくださいね。わたくしもあなたと同じように、この方に導かれて生きていますから」

康子は頷いた。しかし、康子はコーヒーカップを見つめ、自分はこのふたりの間に入ることはできないと思った。コーヒーを飲むと、賢は梓を連れて家の中を一通り説明して歩いた。康子にも一緒に来るように言ったが、康子は遠慮してソファーに座っていた。ふたりがリビングルームに戻ると、康子の姿は無かった。ソファーのテーブルの上に置き手紙があった。

「お忙しいのにお邪魔してしまい、申し訳ありませんでした。アパートに帰ります。周りの景色を楽しみながら、由仁までのんびり歩いて行きます。ありがとうございました」

賢は、「自分の後を追わないでほしい」と言っていると思った。

「雪坂さんは、あなたに恋しているんじゃないかしら？」

「彼女、寂しい人なんだよ。ここに居ると安心なんだろう」

「いいえ、それだけじゃないわ。あの人の目はあなたに恋している目だったわ」

「僕が、誰でも愛してしまうから、結果として相手を苦しめることになってしまうんだな？」

「あなたにとっては、普遍の愛で、すべての人々を同じように愛しても、愛された人の目には、あなたしか映らなくなってしまうのよ。そして、自分のことだけを愛して欲しいと思ってしまうの。愛する意識を全ての人にまで広げること、全ての存在にまで広げることがどれだけ難しいか分かるでしょう？」

「そうだね。自我が残っていると、そう云う意識は生まれてこないからね。自我があるときの愛は、相手に自分だけを見ていて欲しいという、独占欲に繋がってしまうからね」

「わたくしも本当は辛い。あなたがいろいろな人を愛しているでしょ

う。だから、わたくしのことを本当に愛しているのかしらなんて思って
しまうことがしばしばあるのよ。でも、この頃やっと、あなたという存
在が分かってきたわ。あなたはわたくしを愛しているわ。あなたにとっ
ては、祐子さんも、わたくしも同じなのですね。だから、わたくしは、
あなたの女房になり切ろうと思ったの。恋人じゃなくても構わない。あ
なたの愛の中に生きていたいわ」

賢は梓を抱き寄せた。梓は目を閉じた。梓は賢の胸の中でうっとり夢
心地になった。

「梓、君は、幽霊は怖くないよな？」

「以前は怖かったわよ。だけど、あのオーラビジョン・システムで、亡
くなった人を見てから怖くなくなったわ」

「君の寝室と、君の趣味の部屋になる部屋は、お化けになって出ていた
この家の持ち主の奥さんの部屋だったんだ。もう、お化けで出ることは
ないけどね」

「そうですか。でも、怖くないとは言っても、何か気味が悪いでしょう。
暫くは、わたくしはあなたのベッドと一緒に寝かせて頂きたいわ。良い
ですか？」

「もちろんだよ。僕もそのつもりだよ」

それから、ふたりは梓の荷物の整理を始めた。梓は品物を種類ごとにき
ちんと整理して梱包してあった。開梱すると、どこに納めたらいいのか
直ぐに分かるようになっていた。賢はそこに梓の整然とした意識の状態
を見た。その意識の状態は、この次元の中では、これ以上きちんと出来
ないと思えるほどの4（しくみ経綸）の状態だった。これを5（超越）に導く
ことはかなり困難だと思われた。しかし、賢は「一緒に住んでいる間に、
何とか梓をその状態に移行させたい」と思った。祐子がやり遂げた道だ。
夕日が傾き掛ける頃、梓は大きく伸びをして叫んだ。

「終わった！・・・もうこれで不自由のない生活ができるわ。あな
た、ちょっといらしてください」

梓の趣味の部屋からだった。

「わたくし、ここを研究所にしても良いかしら？」

机の上にPCが置いてあり、棚の上には様々なガラスの容器が並んでいた。日暮里の梓のアパートでは、一度も目にしたことのないものばかりだった。部屋の中央にある座卓の上には、試験管やビーカーをゴムチューブとガラス管で結合した装置が置いてある。何かの化学反応の試験をするような装置に思えた。

「梓、君にはそんな趣味があったの？」

「いいえ、これからここで研究を始めるために、東京でしか手に入らなそうなものを集めて来たんです。これ、何をやる装置だと思いますか？」

「生命を作る実験じゃないのか？梓のやりそうなことだから」

梓は、にっこり笑うと、言った。

「残念でした。でも近いわ。わたくしはいつも、いろいろな微生物が、知らないうちに湧いてくるという現象を不思議に思っていたんです。何時の日にか「どうして生き物が湧くのか解明したい」と思ったのです。シストもそうですけど、生命の全く無いところや、一旦死んでしまった物質から生命が湧き出る現象。あなたも不思議に思いませんか？炒り豆に芽が出て、花が咲く……この世界がわたくしたちが考えるような単純なものではないことを、はっきりさせたいのです。きっと原さんの影響ね」

「はっはっはっは……そうだね。絶対原さんの影響だな。だけど、楽しそうだね。あまり没頭しすぎて身体を壊すなよ」

「あなたの趣味の部屋はどうされるのですか？まだ、オーラビジョン・システムしか置いていらっしやらないようですけど」

「あそこはフリースペースにしておきたいんだ。いずれ、原さんも来るだろうし、愛子も来る。数馬夫妻も来るだろう。いろいろな人が来るようになると思う。誰が来ても、好きなことをやれる場所にしておこうと思っているんだ」

ふたりは空腹感を覚えていた。夕食をささやかなパーティにすることにした。賢は冷蔵庫から白ワインを出しコックを開けた。梓はレトルトのピザとスパゲティを電子レンジで温めた。ふたりは白ワインで乾杯した。

「あなた、今日からよろしくお願ひします」

「こちらこそ、よろしく、梓に乾杯」

「あなたに、乾杯」

その晩梓は、暖房の効いた賢の寝室にネグリジェ姿で現れた。賢はそんな格好の梓を見るのは初めてだった。少し恥ずかしそうにしながら、部屋に入って来ると、ベッドの脇に腰掛けている賢に声も掛けずに、黙ってシーツの中に潜り込んだ。賢は梓に言った。

「少し、瞑想をするからね」

「はい」

梓は賢に背を向けたまま、振り向かずに応えた。

賢はこの日の省察を行った。康子の悲しみに満ちた心の動きが手に取るように分かる。賢は、癒すのに時間が掛かると思った。今日の梓はとても明るかった。両親のことも、プロジェクトのことも負の意識に繋がる部分はなりを潜めていた。それを押さえ付けているようには思えない。自分の中で上手く調和させているのが分かった。賢はアフリカのふたりの女性に意識を移した。祐子からも、亜希子からも反応は無かった。賢は瞑想を解き、シーツの中に潜り込んだ。

翌日は快晴だった。寝室には朝日が差し込んでいて、昨夜からエアコンが点いていたためか、部屋の中がぼかぼかと暖かい。梓は賢の腕の中で目を覚ました。ベッドの下にネグリジェとパジャマが脱ぎ捨てられている。

「もう、陽が高いのね」

「何時になるんだろう。梓、今日は滝川の実家に行くんだろう？僕も附いて行こうかな？」

「金曜日に赴任休暇を取ったから、その時に出掛けようと思っていたの。あなたが一緒に行ってくれるなら、今日行ってもいいわ」

「それじゃあ、なるべく早く出掛けよう。滝川までなら、車で2時間もかからないだろう」

梓は既に実家に行く準備をしてあったので、直ぐに出掛けることができた。途中分岐があり、左折するとV E A S館の方向に向かう交差点を岩見沢方面に右折した。

「梓、今度VEASに行ってみないか？この近くにあるんだよ」

「はい、わたくしも調べました。ここのVEAS館は新しいアイテムの試行を行うところのようです。自然界の神秘を体験できるらしいです。人間の意識でどこまで入り込めるか、意識とどこまで解け合えるかを研究するための実験サイトのようなわ」

「さすがに梓だ。僕はついこの間、雪坂さん達と行ってきたばかりだよ。鳥の体験をしてみた。火とか風とか、5大を意識したテーマを試行しているようだけど、空は無かったな。僕もこの次は是非、風の体験をしたいと思っているんだ、梓はどうか？」

「わたくし、新宿で植物と動物の体験はしています。楠木さんがVS館をベースにした構想を強く主張し始めた頃、VEASに通ってみました。風、面白そうですね。目に見えないものをどんな風に表現しているのかしら、楽しみだわ」

ふたりは翌週の日曜日にVEAS館に行くこと決めた。梓の両親の実家は滝川の山の手にあった。家に入る前に梓が言った。

「以前は牧場を経営していたんです。両親が高齢になったので、牧場を手放して、現在は父が一人で住んでいます。母は実家から3キロほど離れた所に在る介護老人ホームに入りました。父が1日置きに様子を見に行っています」

実家は古い2階建ての家だった。梓は玄関に附いている呼び鈴を押さずにそのまま引き戸を引いた。由仁の家と同じように、入り口の引き戸を開けると、内側にもう一つの引き戸があった。

「お父さん、ただいま！」

「梓か？」

奥の方から囁いた男の声がして、腰の曲がった老人が杖をついて玄関に姿を現わした。頭髪は白く顔は皺だらけで、目は白く濁っていた。

「お父さん、ただいま。今度、札幌に転勤になったのよ。これから、ちょくちょく来れるわ。お父さん、私の上司の内観さんよ……あなた、こちらは父です」

「初めまして、梓さんの同僚の内観と申します。よろしくお願ひいたし

ます。これはつまらないものですが……」

賢は途中で買って来た菓子折を父親に渡した。

「どうも、ご丁寧に……内観さんですか、梓の父です。まあ、上がってください」

玄関を上がるとそのまま廊下になっていて、賢はすぐ右側の部屋に通された。そこは応接間形式の居間で、ソファーとテーブルが置いてある。普段は人が入らないらしく、静謐な雰囲気を感じさせる。

「お父さん、お母さんはどう？」

「相変わらずだべ。こっちの話は分かるみたいだけど、言葉が見付からないようだよ。それで、時々俺んことも、よそん人と間違えたりする。最初はそのたんびに、ちょっとがっかりしたりしたけど、今じゃ、あいつのことを可愛そうだと思うようになったべ。死ぬまでこの世のもんがちゃんと分かっているんは、有り難いことだべな。後でお母さん所に寄ってやってくれるだべな？」

「うん、行って来るわ。お父さんはどうする？」

「俺は、今日は行く日じゃないから止めとくべ。カレンダーに丸印を付けて、俺の行く日を教えているんだべよ。おかあさんが、こんがらがるだろう。ホームさ入ったばかりの頃、約束の日より前に行ったら、俺と、脳神経科の先生を間違えてさ、俺んことを「先生様、私はなんもこわくないのに、一体、どこが悪いんでしょうか？」なんて言ったんだべよ。あの頃は、とくにわやで（ひどくて）、風呂の入り方も忘れてしまっていて苦労しただべよ。今じゃ、毎日同じように生活させるから、前ほど手が掛かんなくなったようだけんどな」

梓は、賢をダイニングに連れて行って、テーブルに座るように促した。家の中は、生活のエネルギーを感じさせなかったが、きちんと片付いていた。火曜日と金曜日にホームヘルパーが来て、家の中の片付けや掃除をしてくれるとのことだった。梓は台所に入って茶を入れながら、遅れて入って来た父に言った。

「お父さん、一人で大丈夫？」

「俺は大丈夫だべ。一人で生きることは、何も苦になんないだべよ。そ

れよか、おまえ、こん人と結婚するんだべや？」

父親は梓に向かってそう言うと、賢の方を窺った。賢が応えた。

「はい、私たちは、これから暫くの間、一緒に生活します」

「そうかね、梓は、なまら（すごく）めんこくて（かわいくて）、優しいめんた(子)だから、可愛がってやってくださいね。私らは、こん子が居るから生きていようという気力が湧くんだべよ。んでね、こん子は人一倍頭がいいんだべ。私らの子供みたくないんだべよ。生意気なことば言っても、虐めないでやってくださいね」

「おとうさん、内観さんは私の何倍も優しいのよ。それに頭も私の何倍もいいの。だから安心して」

茶を出しながら梓が言った。父親は賢に、両親のことや経歴などを質問した。賢は、「やはり親は娘のことが気懸かりなのだ」と思った。

ふたりは実家を出て、母の入居している介護老人ホームに向かった。受付で尋ねると、母親の部屋は4階の455号室だということだった。行って見たが部屋の中に母の姿は無かった。看護師の控え室に行くと、ボランティアの人たちが来て、歌を歌っているから、「集いの部屋」に行くようにと言われた。賢は梓の後に附いて看護師に言われた「集いの部屋」に行ってみた。部屋に近づくと、合唱団の歌声が聞こえてくる。その声に混じって、老人達の音程の外れた歌声が聞こえる。賢と梓は、開け広げられている入り口からそっと、中の様子を伺った。少し高くなっている演壇の上で白のブラウスに紺のベストとスカート^はを穿いた6人の女性達がコーラスをしている。きれいな声のハーモニーだった。「どこかで春が」という歌である。10人ほどがテーブルの周りの椅子に座って聴いている。老人が5人ほど車椅子に座って聴いていた。杖を横に置いて、椅子に座って眺めている人、看護師に付き添われている人も居た。みんな壇上の合唱団の方を見て歌ったり、ただぼ一っと聞いたりしている。梓が賢の方を見て小声で言った。

「あの、看護師さんが付き添っている人、あの人が母です」

白くなった髪はあまり手入れしていないようだが、身だしなみはきちんとして、顔も他の老人達より皺が少なく、澁刺としているように賢

には思えた。母親は口をもぐもぐさせているが、歌を歌っているようではなかった。「どこかで春が」の歌に続いて、2曲が歌われた。次の歌になったとき、母親の顔が嬉々としてきて、楽しそうに歌い始めた。それは、「さくら」だった。梓が小さな声で言った。

「母は、桜の花が大好きなんです。北海道は桜前線が一番最後に昇って来るでしょう。テレビで全国の桜の開花のニュースを見ると、目を輝かせていたわ。北海道の桜も綺麗なの。札幌、母に連れられて、よく見に行ったわ。母は、何時も「さくら」を唄ってくれたのよ。母の最高の歓びはみんな桜に関係していたの。忘れてないのね」

梓の瞳が潤んでいた。やがて合唱団の美しい歌が終わると、老人達は一斉に拍手をした。母もみんなに合わせて両手を打ち合わせ、頭を下げた。まるで神前に祈りを捧げてでもいるかのようだった。老人達が一人、また一人と去ってゆくと、老人数人と母と看護師が後に残った。老人達はそこで、また歌を歌い出した。看護師が母を促すようにして立ち上がらせた。母はテーブルに手を突いて立ち上がろうとして、入り口の方を見た。

「あ・ず・さ・さ・さ・さ・あ・ず・さ・さ！」

母のとぎれとぎれだが、しっかりとした声が、周りの老人達の視線を引き付けた。梓は看護師に向かって頭を下げた。看護師も頭を下げて、母の腕を抱きかかえるようにして、入り口の所に母を連れて来た。

「お世話になります」

「おかあさん、しっかりなさっていますよ」

看護師がそう言うと、梓は母に向かって言った。

「おかあさん、元気そうで、よかった」

「あずさ、どこ行ってたべさ？」

「おかあさん、わたし、今度、近くに住むから、時々来るからね」

「そうかい。もう遠く、行かないでおくれよ。おまえだけが頼りだべさ
・・・あっ、先生さま、ありがとうさんでした。検査の日なんだべな」

母は賢の方を向いてそう言った。賢はにっこり笑って頭を下げた。

「おかあさん、このひとは、内観賢さんよ。私の大切な人よ」

梓は賢の背に手を廻して、母に紹介した。

「内観賢と申します。梓さんと一緒に働いています」

「先生様、よろしくお願ひします」

「おかあさん、先生じゃないのよ。私の旦那様よ」

「ああ、そうかい。旦那様、梓の旦那様、梓をよろしくお願ひします・
・・・先生様、検査はどこでやるべな？」

まだ、賢のことを病院の医師と混同している。賢と梓は、看護師に附いて母の居室に行き、そこで暫くの間母と、時々つじつまが合わなくなる話をしていたが、賢は会話の内容から、母が梓に全面的な信頼を置いていて、梓が東京に住むようになってから、急に老いが進んだのだということを知った。老人ホームには食堂があり、外来者も食事をするのができたので、ふたりは母と昼食を共にした。梓は途中の土産物店で買って来たイカめしを食卓に添えた。梓は母の食事の世話をし、母が食べるのを中断すると、衰えた母の手を取って擦ってやっていた。そうすると、また食事に意識が向くようだった。

「イカめし、美味しい・・・あずさ、赤ちゃんはどこにいるべ？」

梓は賢の方をちらっと見て顔を赤らめた。それから、賢の方を見ないようにして言った。

「おかあさん、赤ちゃんはまだできてないわ」

「あずさ、早く、おまへの、赤ちゃんを、見たいよ」

母の意識はこと、梓に関する限り、認知症の症状をそれほど感じさせなかった。食事が済むと、ふたりは引き時を探していた。前回、アメリカに出張する前に訪れたとき、母は梓の「帰る」と言った言葉に泣き出してしまい、梓も辛い思いをした。この日は母を悲しませないようにしたかった。

「お母さん、私、仕事があるから、帰るわね。今度は札幌に居るから、直ぐに会えるわよ。また来るから、元気でいてね」

「あずさ、分かったよ。今度は赤ちゃんを連れてくるんだべ？」

「おかあさん、赤ちゃんはまだよ。だけど、おみやげを買ってきてあげる。お母さんの好きな牛乳せんべい買って来てあげるからね」

何とか母を説得できたと思った。梓が立ち上がり、賢も椅子から立つと、母の目から大きな涙が流れ落ちた。

「おかあさん、また、直ぐに来るから。お父さんも明日来るからね」
母は黙って頷いた。

ふたりが家に戻ったのは、既に陽が落ちて、辺りが薄暗くなり始めた頃だった。

「お母さんの痴呆症はそれほど進んでないのかな？」

「私が居るときは、かなりしっかりしているようなんだけど、私が帰った後は、腑抜けの様になってしまいうらしいの。私も近くに居てあげたいんだけど・・・」

「愛だな。愛があると、人はどんな状況でも生きられる。今日、お父さんが言っていただろう。梓が居るから生きてゆけるって。君の愛情が、ご両親を支えているんだよ」

「あなた、私はあなたに出会ってから、変わったの。それまでは、両親のことは、滅多に顧みなかったわ。実家に帰っても、そこは自分の寛ぐところという程度の意識しかなかった。両親が年老いてゆくことは分かっているけど、自分から見た両親だったの。自分が居て、初めて両親が見えたわ。今は違うわ。両親と会うと、逆に両親の目から見た自分が見えるような気がするの。私のことを見ている母は、私そのものなのね」

「梓、そこまで来ていたら、もう少しだね。梓とお父さんやお母さんの間に、何の区別も無くなったら、自分の核心に戻ってゆけるんだ。逆説的だけどね。自分が無くなれば、本当の自分が現れてくる」

「だけど、どうして、あなたと一緒に生きるようになると、こんな風に変われるのかしら？きっと、あなたは特別の存在なんだわ」

「そんなことはないよ。誰でもみんな同じだよ。ただ、気付いているか、いないかの違いだけだよ」

翌日、梓は賢の車に同乗して北海道支社に本社した。10階の総務部に直接出向いた。支社長直下の企画次長としての赴任初日だった。梓が受付に姿を見せると、支社長の秘書が迎えに出てくれた。梓は案内されて支社長室に通された。既に支社長は本社にいて、自分の席に着いてい

たが、梓の姿を見ると立ち上がって、手前にある応接用のソファに座るように右手を上げて示した。